

十一月二日佛軍北京ヲ發ス○十一月七日及九日英軍ヲ出發○十一月十四日兩軍天津ニ集合
天津ノ英陣○英軍ノ上船○ロールエルシヤン及ヒシ・チラグラジ
ト兩氏ノ出發○コリノ一將官天津佛兵ノ指揮官トナル○天津ノ佛
陣○ジヤマン將官佛兵ノ大部ト共ニ上船○バアロングロウズ及ヒ
モントハン兩氏ノ出發○舟山島ノ戍ヲ撤ス○出征ノ略説

天津ノ講和

同盟兩軍ハ白河口ノ戰勝ニ由リ清人ヲシテ和ヲ請フノ念ヲ起カシメ
天津府ニ於テ和約條款ヲ結了スヘキ事ハ佛英兩國政府ノ預レメ期ス
ル所ナルハ未タ其期ニ至ラスシテ敵ヨリ送ル所百般和好ノ論議ハ渾
テ之ヲ擯斥セシカ是ニ至テ兩國ノ全權公使ハ清廷ノ和ヲ請フヲ允サ
ントス

同盟兩軍天津府ニ至ルニ先タテ兩國ノ全權公使ハ清廷ニテ顯官ヲ特
派スルノ報ヲ得タリ其人ハ千八百五十八年天津ニ於テ和約ノ章程ヲ
會議セシ所ノクウエリンク氏(景亮カ)ニシテ三十日天津ニ着シ其請求
ニ由リ將ニ和約ノ會議ヲ開カントス

兩國特派全權公使ト清國全權公使ト論辨數回ニ後英國全權公使ニ今
回ノ戰ニヨリ其國ノ損失殊ニ莫大ナレト商量斟酌ヲ加ヘタル由ヲ述
テ賠償ヲ求ムルノ金額ヲ發言シタリ願フニ英國ニテハ一般貿易上ノ

九月五日事

九月七日背約

利益ハ勿論殊ニ鴉片鬻賣上ノ利益等ヲモ算定スヘク是レ實ニ英國ノ
專ラニスル所ニシテ佛國ニ於テハ敢テ望ムヘキ所ニ非ス然レハ佛公
使バアロンクウス氏ハ英國ト相異ル要求ヲ以テ彼我ノ煩雜ヲ生ス
ルヲ欲セサルニ由リ兩國公使ハ異儀ナク講和ノ章程ニ承諾スルニ至
リ北京ニ於テ其條約ノ交換ヲ行フヘキニ決シタリ
英人ハ軍容ノ鮮麗ヲ以テ和約信書交換ノ儀式ヲ裝飾セント欲シ步騎
砲ヲ連合シタル一千名ノ護衛兵ヲ引率シテ北京ニ赴クヘキヲ主張シ
クウエリンク(景亮カ)ハ初メ大ニ之ヲ拒ミシト雖トモ英人肯セス佛國
司令長官ハ今和好條約ヲ結ハントシテ兵威ヲ耀スハ大ニ不可ナル由
ヲ懇々辨明セシト雖トモ其説行ハレス諸事同盟兩國同等均一ナルヘ
キヲ以テ在テ之ニ從フト云フ
佛英兩軍ニテ護衛ノ編成ニ着手スルニ當リ和約信書ノ捺印ヲ施行ス

北京ニ赴ク準備

ヘキ日即チ七日ニ於テクウエリンク(景亮カ)ヨリ英公使ニ密報スル所
ニ據レハ同氏ノ名目ヲ以テ締約セシ條款ハ總テ無効タリ清廷ノ命ヲ
受クルヲ此ノ如シ云々ト兩國公使之ヲ聞テ實ニ驚駭セリ抑モクウエ
リンクハ初メヨリ講和ノ全權ヲ帶ルニアラス全ク僧格林沁氏ヲシテ
國都ニ兵衆ヲ糾合シ新ニ防禦ヲ爲スノ猶豫ヲ得セシメントシ故テニ
打扮セル一場ノ演劇タルニ過キササルノミ(卷末ノ附録上表ヲ見ユ)
清國全權公使ノ偽物タル事暴露セシヨリ大ニ彼ノ誦詐ヲ惡ミ和議ハ總
テ之ヲ拒絕シ英佛全權公使ハ北京ヲ距ルヲ五里ノ地ナル通州ニ至ラサ
レハ清廷ヨリ和ヲ請フニ之ヲ受クヘカラストシ諸事ヲ軍隊司令長官
等ニ委任シタルニ由リ兩國將官ハ兵ヲ引テ復タ進行スルニ決セリ
佛將モントパン氏並ニ英將シルチフランド氏ハ直チニ進行ノ準備
ヲ爲シ適宜ニ其部下ヲ分チ天津府ニモ警備ノ兵ヲ留メタリ蓋シ今ニ

リ天津府ヲ以テ根據トシ必要物ノ貯蓄所トナサ、ルヲ得サレハナリ
天津府ヲ守衛スヘキ者ハ佛軍ニ少將コリノ―氏英軍ニ少將シルロベ

ルナアヒエール氏ノ部下トス

英軍ハ其進發スヘキ兵ヲ二縱隊トシ其一ハ步兵第九十九聯隊龍騎兵
聯隊シツク、フア子―スノ不規兵及ヒアルムストロンクノ二中隊ヲ以
テ編成シ總員一千名其二ハ第六十號ライフル隊第三號ヒスス並ニ騎

兵ノ殘餘ヲ以テ編成シ總員二千名ナリ

佛軍ノ進發スル者ハ將校卒凡ソ二千八百八十六人ヲ以テ一隊ヲ編成
セリ即チ中將モンドバン氏ノ發程前ニ當リ部署セシ者ヲ表出スル左
ノ如シ

第一中隊 中將モンドバン氏
第二中隊 少將シルロベ氏
第三中隊 少將コリノ―氏
第四中隊 少將ヒスス氏
第五中隊 少將アルムストロンク氏
第六中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第七中隊 少將フア子―ス氏
第八中隊 少將ヒスス氏
第九中隊 少將アルムストロンク氏
第十中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第十一中隊 少將フア子―ス氏
第十二中隊 少將ヒスス氏
第十三中隊 少將アルムストロンク氏
第十四中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第十五中隊 少將フア子―ス氏
第十六中隊 少將ヒスス氏
第十七中隊 少將アルムストロンク氏
第十八中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第十九中隊 少將フア子―ス氏
第二十中隊 少將ヒスス氏
第二十一中隊 少將アルムストロンク氏
第二十二中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第二十三中隊 少將フア子―ス氏
第二十四中隊 少將ヒスス氏
第二十五中隊 少將アルムストロンク氏
第二十六中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第二十七中隊 少將フア子―ス氏
第二十八中隊 少將ヒスス氏
第二十九中隊 少將アルムストロンク氏
第三十中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第三十一中隊 少將フア子―ス氏
第三十二中隊 少將ヒスス氏
第三十三中隊 少將アルムストロンク氏
第三十四中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第三十五中隊 少將フア子―ス氏
第三十六中隊 少將ヒスス氏
第三十七中隊 少將アルムストロンク氏
第三十八中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第三十九中隊 少將フア子―ス氏
第四十中隊 少將ヒスス氏
第四十一中隊 少將アルムストロンク氏
第四十二中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第四十三中隊 少將フア子―ス氏
第四十四中隊 少將ヒスス氏
第四十五中隊 少將アルムストロンク氏
第四十六中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第四十七中隊 少將フア子―ス氏
第四十八中隊 少將ヒスス氏
第四十九中隊 少將アルムストロンク氏
第五十中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第五十一中隊 少將フア子―ス氏
第五十二中隊 少將ヒスス氏
第五十三中隊 少將アルムストロンク氏
第五十四中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第五十五中隊 少將フア子―ス氏
第五十六中隊 少將ヒスス氏
第五十七中隊 少將アルムストロンク氏
第五十八中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第五十九中隊 少將フア子―ス氏
第六十中隊 少將ヒスス氏
第六十一中隊 少將アルムストロンク氏
第六十二中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第六十三中隊 少將フア子―ス氏
第六十四中隊 少將ヒスス氏
第六十五中隊 少將アルムストロンク氏
第六十六中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第六十七中隊 少將フア子―ス氏
第六十八中隊 少將ヒスス氏
第六十九中隊 少將アルムストロンク氏
第七十中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第七十一中隊 少將フア子―ス氏
第七十二中隊 少將ヒスス氏
第七十三中隊 少將アルムストロンク氏
第七十四中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第七十五中隊 少將フア子―ス氏
第七十六中隊 少將ヒスス氏
第七十七中隊 少將アルムストロンク氏
第七十八中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第七十九中隊 少將フア子―ス氏
第八十中隊 少將ヒスス氏
第八十一中隊 少將アルムストロンク氏
第八十二中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第八十三中隊 少將フア子―ス氏
第八十四中隊 少將ヒスス氏
第八十五中隊 少將アルムストロンク氏
第八十六中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第八十七中隊 少將フア子―ス氏
第八十八中隊 少將ヒスス氏
第八十九中隊 少將アルムストロンク氏
第九十中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第九十一中隊 少將フア子―ス氏
第九十二中隊 少將ヒスス氏
第九十三中隊 少將アルムストロンク氏
第九十四中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第九十五中隊 少將フア子―ス氏
第九十六中隊 少將ヒスス氏
第九十七中隊 少將アルムストロンク氏
第九十八中隊 少將ライフル隊第三號ヒスス氏
第九十九中隊 少將フア子―ス氏
第一百中隊 少將ヒスス氏

進發スヘキ諸兵

隊名	將校	下士卒	乘馬	駄馬
司令長官ノ一行	五	一七	一四	一三
總參謀部	三	一三	六	五
地圖課	五	一二	八	十
第一旅團ノ參謀部	三	九六五八	七	六
輕歩兵聯隊	三一	三〇八	四	二二
第一百聯隊	四九	四四七	八	四二
砲兵	二六	二一八	六七	二〇八
工兵	一〇	七	一五	三五
憲兵	一	四〇	八	
騎兵	四	六五	四四	四
會計部	一五	一四〇	七	二六
擔夫隊		三七四		
小計	一五二		一八八	三七〇
總計		二八八六	五五八	

①砲兵

第十四聯隊ノ第十中隊(四斤野砲)

第十四聯隊第九中隊(十二斤忽微砲)

橋船兵ノ枝隊(七十名)

火箭隊(五十名)

天津府守衛諸兵

隊名	將校	下士卒	乘馬	馱馬
總參謀部	三	六	六	四
第二旅參謀部	三	一〇	六	五
輕步兵第一大隊	一	六二		
重步兵第一聯隊	一	五四		一
重步兵第二聯隊	五九	一三三〇	九	三六
海步兵	四二	九四七	四	四一
砲兵	二二	四七〇	一一〇	一一三
兵工	二	一〇四	二	三
兵憲	一	七	三	
兵騎		一一	一〇	三
會計部	二七	一七二	一〇	三七
擔夫隊		九六〇		
小計	一六〇	四二二三	一七〇	二六二
總計		四二八三	四三二	

①砲兵

第十六聯隊第十中隊(四斥野砲)

第十六聯隊第九中隊(十二斤忽微砲)

橋船兵枝隊(二十五名)

九月九日及
十月十一日英
兵天津ヲ發
ス
九月十日佛
兵ノ出發
清國ノ馭者
遁逃

曩ニ北方ニ上陸セシ海軍歩兵ノ全員ヲ以テ白河左岸ノ堡壘ヲ守リ其
右岸ノ堡壘ハ英兵ヲシテ之ヲ衛ラシム

九月九日英國第一縱隊ハシルヲフグラント氏及ヒロールエルヤン

氏ト俱ニ天津府ヲ去テ北京ニ向フ一日ヲ隔テ英ノ殘兵悉ク進發セリ

英ノ兩縱隊發程ノ間即チ十日佛將モンアハン氏ハバアロンクロウス

氏ト俱ニ少將ジャマン氏ノ部兵ヲ引テ出發セリ

佛兵第一ノ次舍タル浦口ニ至リシニ會暴風雨十二時間止ムヲテ清

國馭者ハ夜ニ乘シ馬匹或ハ驟ヲ奪略シテ逃亡ス故ヲ以テ運輸頓ニ絶

シ我軍ノ進退大ニ苦ム

佛兵司令長官ハ初ヨリ白河ノ水流ヲ用テ運輸ヲ開カント欲シ艦隊司

令長官レヤルチト氏ト相計リ海軍ノ一士官ヲシテ白河ノ水流ハ何ノ

處迄航行シ得ヘキカヲ探偵セシメタリ然レニ其士官ハ天津ノ出口ニ

懿親王及ヒ兵部尙書

白河運輸

於恣不圖方向ヲ失ヒ誤テ左方ニ注ク所ノ河流ヲ認テ白河ノ流水トナシ往ツク二里許水頗ル淺ク小船タモ猶ホ膠シテ通スルヲ能ハサルニ至レリ
是ヨリ佛將モントパン氏ハ天津府並ニ其他近傍ニ於テ多ク車輛ヲ微發シテ運輸スルノ外復タ他策ナク且ツ同氏モ馭者ニ馬ヲ奪レシ以來露營ニ着セシ時始メテ乘馬スルヲ得タリ此時佛將ハ白河上ニ堅牢ナル清國船アルヲ望ミ見テ之ヲ清人ニ問フニ通州ヨリ來ル者ニシテ其數夥多アリト答フ遂ニ其船舶二十餘艘ヲ得テ漸ク運輸ノ路ヲ開ク此運輸ハ橋樑兵カ常ニ擔任シテ施行セシニ由リ軍隊ヲシテ通州ニ至ルマテ糧食ノ完全ヲ得セシメタリ然レトモ此運輸法ハ頗ル不廉ニシテ各船一日ノ僦賃一弗ナリト云フ
同盟兩軍進行スルヲ二日清國ノ皇族ツサア(懿親王カ)及ヒ兵部尙書ク

チ兩國公使ニ贈ル

河西務ノ滞在

講和條約

疑團

ウ(奕毓カ)書チ兩國特派全權公使ニ贈ル其大意ニ謂フ今回我輩二人和約全權ノ特命ヲ受ケ天津ノ會議ヲ履行スヘシト
然レモ兩國ノ將官等ハ清人ノ詐謀ニ懲リテ尙オ河西務迄進行セリ是ニ至テ諸兵會同シ九月十六日マテ滯留シ其間兩國ノ公使ハ清人ノ和議稍ヤ信スヘキヲ察シ其言ヲ納レントス
ローレルエルシヤン及ヒバアロングロウスノ兩公使ハ直ニ兩軍將官ニ報シテ曰ク凡百ノ難事ハ全ク消滅セルカ故ニ我輩通州ニ於テ清廷委員ト會議ス故ニ諸兵ハ通州ヲ距ル二里ノ所ニ屯在スヘク且ツ和成ルノ日信書交換ノ爲メ北京ニ至ル時我輩ニ隨行スヘキ者ハ寡少ノ護衛兵ニシテ足レリト
兩國ノ將官殊ニ佛將モントパン氏ニ事情疑フヘキ者アルヲ以テ未ダ公使ノ報告ヲ信セズ

天津ヲ去リ徐ロニ進行スルコト土人等曩ニハ縱隊ノ通行ヲ見テ咸ナ欣然諸物品ヲ供スト雖トモ今ヤ到ル處門戸ヲ鎖シ恰モ無人ノ境ヲ行クカ如ク一物タモ得ルヲ能ハス

河西務ヨリ軍隊ニ先行セシ英人バアンス氏ハ清廷官吏ノ來着セシ以來土人供給ノ情態頓ニ變スルヲ以テ糧食ノ支給ヲ得ルハ脅嚇手段ニシカスト考定シ且ワアレ一氏英人ト俱ニ通州ニ於テ清國官吏ニ就キ和約ニ關スル諸事ヲ照會セシニ其答辭頗ル不遜ヲ極ムルニ由リ毫モ拒絕ノ辭氣アラハ直チニ兵馬ノ間ニ相見ルヘキヲ以テ之ヲ威嚇シタリト云フ

士官數名通州ニ派出ス

一タヒ此恐嚇ノ言ヲ發セシヨリ清國官吏ノ口氣頓ニ變シ極メテ温和恭順復タ前日ノ不遜ヲ見スバアンス氏陣營ニ歸リ衆ニ告ケテ曰ク人民皆和セント欲シ少クモ供給ヲ缺クノ意ナシト兩國公使以テ然リト

爲シ敢テ疑ヲ容レズ兩軍將官モ亦稍ヤ之ヲ信シ通州近傍ニ滯留中要スル所ノ需用物品ヲ蒐集スヘキ爲メ士官數名ヲ通州ニ派遣スルニ決定セリ

此職務ヲ帶ヒテ派出スル者ハ殘忍酷虐ノ禍難モ辞ス可カラサルモノアリ今其選ニアタリシハ佛軍ノ副督シウピ一氏砲兵大佐フウロンダランドシヤン氏參謀大尉シヤノワン氏會計士官アデル氏及ヒガアケ一ル氏スハアイ隊ノ士官ケイドチスマン氏宣教師ニレテ司令長官ノ譯官タルシウロウク僧公使館附屬バスタール氏メリタン氏等ナリ英軍ニテハバアクス氏及ヒロトク氏ニシテ之ニ中尉アンテルソン氏ノ指揮スル騎兵二十名其内シクス隊十九名及ヒ龍騎兵隊一名等ヲ以テ其護衛トナシタリ其他英ノ參謀長騎兵中佐ワルゲル氏ハ馬匹ヲ置クニ場ヲ探偵スル爲

同行シ且ツオノム新聞社通信委員亦ハ民並ニ上海公使館ノ附
屬員ノルマン氏等モ亦同行セリ

九月十七日
河西務ヲ發
ス

九月十七日同盟兩軍ノ司令長官ハ河西務ノ陣營ヲ撤シテ進發セリ
英將シルナフグラント氏ハ糧食貯蓄ノ守衛ニ供スヘキ第三十一聯隊
ヲ除キ其他ノ諸兵ヲ引率ス

佛將モントハン氏ハシヤマン少將ト俱ニ輕步兵六百名工兵一中隊重
歩兵第一百一第百二兩聯隊中ヨリ撰拔シテ立中隊四斤野戰砲一中隊
等ヲ率テ發ス其總員一千百名ニ過洋ス

天津府ニ滞在スル少將ロウノ氏其旅團中ヨリ撰拔シタル諸兵ヲ
率井テ北京ノ和約儀式ニ會スヘキノ命ヲ受クシヤマン少將旗下ノ殘兵
ハ河西務ニ在テ運搬シ來ルヘキ糧食ヲ守衛ス然レ他一旦事アリ諸兵
ノ集合ヲ要スルニ當リテハ留マテ所ノ諸兵モ其間僅ニ計三吉羅米突

ニ過キサルニヨリ一日ニシテ先進隊ニ達スルヲ得候シ云フ
即夜諸兵ハ馬頭邑外ニ露營ス同邑ノ講和ノ事稍ヤ確實ニシテ住民ヲ
安堵セシムルモ清國人民ハ棄テ顧更サ厥所ニ居テ王ヲ畏ル

十八日英軍ハ第二聯隊第九十炮隊第十五號ハンシヨフ隊アルムス
トハシテ砲一中隊九リハ砲半中隊シクスハア子スノ聯隊及ヒ龍
騎兵聯隊ヨリ編成セシ者ヲ以テ和約交換ノ間兩軍ヲ占領スヘキ地ニ
向テ進發セシメタリ

佛軍モ亦直ニ發程セリ
兩國ノ兵馬頭ヲ距ルニ八吉羅米突ノ所ニ至ル時英將シルナフグテ
シド氏ハ既ニ強大ナル聯隊ノ前路ニ出テタルヲ見タリ

此報ヲ聞ク佛將ハ直ニ英將ノ許ニ赴キテ自
此時午第八聯隊大シカ英軍ハ先驅民家ヲ稱密ニシテ森林ヲ以テ圍

九月十八日
聯隊兵ノ現
出

此報ヲ聞ク佛將ハ直ニ英將ノ許ニ赴キテ自
此時午第八聯隊大シカ英軍ハ先驅民家ヲ稱密ニシテ森林ヲ以テ圍

鞏鞏兵ノ配

繞シタル平原ノ入口ニ於テ既ニ鞏鞏兵ヲ遮攔セラルノ所ナリ其平原ノ極端ナル我カ進路ニ當テ堤アリ右方ハ白河ニ達スル河流ニ連リ左方ハ張家灣ノ市街ニ界ス
鞏鞏兵ハ五千米突以上ノ一線上ニ排列シ其步兵ノ左方ハ河流ノ近傍リヲスタン邑ニ據リ道路ノ交會點迄堰堤ノ兩側ニ配布シタリ其砲兵ハ砲七十六門ヲ以テ編成セル八中隊ニシテ步兵ノ間隙ヲ彌縫シ其騎兵ハ右方ニ突出シ弧狀ヲ爲シタルヲ以テ我軍ハ敵軍ノ中央ニ位シ全ク其圍繞中ニアル者ノ如シ
目前ノ敵兵殆ト我軍ニ十倍シ勢甚タ危險ナリ
此時バアノス氏通州ヨリ歸リシカ更ニ單身往テ懿親王ヲ見此等ノ理由ヲ詰問セントスロク氏モ亦我兵隊ノ所在ニ來リ此事ヲ調停セシトシ若シ行ハレサレハ再ヒ生還スルノ意ナキカ如シ而シテ同氏ハ

兩國將官戰
争ノ準備

砲兵又爲熱地宜嶺場所敷設知セシ其屬爲英ノ砲兵參謀官大尉オラ我國亦其處ニ砲兵行進線ヲ敷シテ之ヲ以テ同列並ニ兩國會指士官ニ既ニ總兵補國官吏ハ其派兵兩國ニ公使兼駐劄請テ答テ歸總兩國公使吳令現無阿西務ニ在リ假令茲ニ在ルモ到底預定盟約ノ如ク英隊悉電營盤ヲ撤シ清國官吏又面談ハ一切之ヲ謝絶ス之且總兵派兵依然沿河以陣營ヲ保有我ニ交付セサ此報佛總兵兩軍總通州ハ黃直榮告進征スハキ實リ千前報トシテ其意會マ諸人ニ示ス
兩國ノ將官ハバアノス氏ノ還ルヲ待チ戰端ヲ開カント欲シ預メ其準備爲サテ五米以上ノ距離ニ砲兵ヲ配置シテ其意會マ諸人ニ示ス
諸行李輜重ヲ村落ニ集メ諸兵ヲ糾合團結シ佛兵親有方諸英兵並左衛各營然ホキ大番陣セリ況ニ更ニ陣ニシテハ其意會マ諸人ニ示ス
開戰準備ハ臨戰時ニ至ルニ至リ兵モ亦備ハ向氏ハ鞏鞏兵配對ヲ圖リ

清人反覆

清國武弁ニ向フテ其本務ハ專ラ和議ヲ由ラズ由テ反覆解諭シ僅
カニ經過スルヲ得タリト云フ又少頃ニシテパアスタール氏メリタン
氏カオチオス氏會計士官ガ派ル氏等亦歸ル此諸氏ハ途上清
國騎兵一万五千以上及ヒ火繩銃ヲ帶ビタル無數ノ歩兵ヲ望ミ見タリ
ト云フ
此諸報告ヲ達セシハ實ニ午前第十時ニシテ我輩曾テ清人ニ冠スルニ
詐欺反覆ノ字ヲ以テセシモ亦詭言ニ非ルベシ此時韓軍ハ劇シク小
銃ヲ發射シ相繼テ堤上ニ大砲及ヒコンゴ申ル砲ヲ齊發シ方ニ駛走
スル英騎兵ヲ擊破シテ其屍ヲ見ル
英ノ騎兵中佐ウエル氏ハ韓兵我ニ敵スル勢ヲ露シテ其龍騎
兵四名ヲ乘テ急テ敵線ヲ遁レントス然ルニ同氏並ニ佛國會計士官
ウエル氏ハ無敵テ敵兵ヲ逐捕シテ其佩刀ヲ所ノ刀劍ニ奪ハシメテ

九月十八日 張家灣ノ戰

所長陣中並ニ一場ノ争闘ヲ起シテ我軍アリアル氏ハ不意ニ其頭
重傷ヲ受テ卒倒シテ其傳令兵ハ輕歩兵第壹大隊ヲ馳率セテ
又テ死者之ヲ視テ大ニ奮闘ヲ遂ニシテアル氏ハ地ヲ同シテ戰死ス其屍
チアル氏條條然帽子並ニ兵卒ノ銃劍等ヲ其地ニ得テリト云フ
英國中佐ウエル氏モ亦俱ニ戰ヒテ幸ニ其乘馬ヲ駛逸シテ以テ
一條ノ活路ヲ求メ逃レ去ル又テアル氏ノ手ヲ握リテ情義ヲ
表シテリト云フ
此中佐韓營ヲ觀察シテ報道スル所ニ據レテ清軍ノ諸砲門ハ平原ヲ入
目ニ交射スル如ク之ヲ備ヘ諸將ヲ以テ兩軍ノ將官ハ左右兩翼ヲ更敵
陣ノ背後ニ繞出セテ各各自ノ方向ヨリ其運動ヲ始メタリ(第六圖
ヲ視テ)佛兵ハ其兵ヲ排開シ敵兵ヲ以テ之ヲ屏護シ佛兵

佛兵ノ動作

補軍ヲ開隊於該砲隊ヲ備テ懸兵ヲ控防極端ニヲ以テ其邑ヲ森林時前
本隊ヲ輕步兵及ヒスハアイヌ隊ハ英將グラント氏カ我ニ應援セル
佛將連給給本隊ヲ距ル少許ノ地前在テ我軍右翼端ヲ擁護スル
佛將連給給ハ氏ヲ籌策ハ前面ヨリ敵兵ヲ攻撃スル亦同時ニ右翼端
ヲ繞テ村落ヲ侵略スル時其地既我軍所有トテ諸將四十分敵兵
擊破セテ英軍ノ中央迄之ヲ驅逐ス可キヲ以テナリ
此事ハ預定期スル如ク最良ノ結果ヲ得テ何トモ其眼前前敵軍
懸隔中敵兵ノ屯集スル所ヲ潛シ我々歩ヲ退乘機全軍發勝敗ニ關ス
ルヲ各自能熟熟御事並ニ其軍其政變順其左開如クナリ
先ヨリ四野野戰砲ヲ以テ酒田米焚ヲ隔テリ其地ヲ圍テ向テ發射
重砲敵兵ヲ懸懸逃也也其軍其政變順其左開如クナリ
佛兵司令兼官及諸官等其麾下之兵亦河津村村落

騎兵ノ襲撃

間派派遣ルニ當リ夫儀兵隊ハ氏ハ高峻砲臺中砲兵隊砲臺ヲ
襲テ其邑ヲ占據スル無敵敵兵ニ向テ劇烈發射セリ
此時英兵ヲ隊並佛兵隊ヲ派テ及佛輕騎兵支隊隊等ハ英兵
佐ホレト氏ヲ指揮屬スル兵隊右直ニ襲撃シ其歸途小銃ノ
最ニ猛烈ニ遭中尉少尉モ死ス少尉モ死ス少尉モ死ス
兵亦傷者負ヲ然シ此襲撃ハ神速劇烈極シテ以テ至ル所殺傷無
算積骸ノ累ヤタルヲ致シ且ツ砲五門ヲ奪フヲ得タリ
重步兵第百十及第百五聯隊ノ右翼中隊及兵士中隊中佐ヲ殺
スル兵隊指揮員屬大佐ヲ殺スル兵隊以テ統轄ヲ受テ騎兵隊跡踏
此時砲兵隊亦輕步兵ヲ擁護ヲ受テ此地ニ至レテ其地ニ一
此池ヲ略奪セテ以來ハ預定籌策ニ從ヒ同盟軍力ヲ合セテ發砲シ以テ

敵兵ヲ捕獲セシメテ、諸隊ヲ集メテ、其ノ陣中ニテ、佛兵ノ諸部一致協力勇々敵ヲ争鬪スル氣勢ニ至リ、到底抗スル能ハサルノ景況ナリ。我兵沿河ニ堰堤ヲ往クニ、三吉羅米突以上ニ至リ、時堰堤止ニ備置スル。青銅砲六十門ノ發射ヲ蒙リ、雖トモ我砲兵ニ之ニ應ジ、徐ニ發砲ヲ止メ、以テ、佛兵ノ陣中ニテ、佛兵ノ亦其方面ニ於テ功績奏送ト云々。英軍ニ部署ハ初ニ行李ヲ輻輳シ、村落前方ノ路上ニ九リブル砲五門ヲ備ヘ、其地位ニ高峻ナルヲ利用シ、敵陣ニ向テ劇烈ニ發射シ、而シテ之ヲ援護スル歩兵連、俱ニ其地ヲ固守セリ。此隊ニ英兵有翼ニ、或テ南翼ヲ中軸ニシテ、清敵之ヲ建、隔リ、地ニ在テ、迂回運動、復爲セリ。英將ニ、英兵及モ、ハ、ア、以テ、聯隊中、佛兵部、并、第、二、

英兵ノ動作

兩軍ノ集合

聯隊等ヲ以テ左翼ニシ、司令長官ハ、後垣ノ殘餘及、聯隊中、佛兵部、并、第、二、英兵部中、佛兵部、并、第、二、初ニ英兵ノ砲火ヲ以テ、騎騎ヲ擾亂セシメ、エト、將官繼ニ、騎兵襲撃ヲ以テ、充分敵兵ヲ捕獲ス、雖トモ、其逃走ヲ速キル、潛匿ノ巧ナルヲ以テ、悉ク之ヲ殲スル能ハズ。英軍部中央ニテハ、シルチングランド氏ハ、慣手ノ策略ヲ以テ、徐ロニ其砲兵ヲ發射シ、步兵ヲシテ、之ニ近接シ、騎兵ノ右方ニ進マシメ、騎兵ノ守地ヲ略有クシ、得且ツ、此時管テ、佛兵ノ攻撃ヲ受テ、逃走セ、敵兵ニモ發射シ、テ、大其處ヲ破リ、佛兵ト云フ。佛兵兩軍ノ、タ、以テ、中高地ニ集合セシ、ハ、午後第三時ニシテ、此時敵兵、全ク原野ニ逃レ、及、西、清、敵、兵、表、清、水、邊、盟、反、覆、ハ、却、因、意外、失敗、速キ、カ、如シ、其、講、和、新、確實、表、

張家灣前方
ノ偵察

昨ノ確報ヲ得タリシカ其後防禦維持ノ方法ヲ見且ツ間諜ノ報スル所ニ
據ルニ此開戰黨渠魁タル僧格林沁ハ親カラ出テ終始兩軍ノ北京ニ
近接スルヲ拒ムコトヲ稍ヤ確實ナルカ如シ
二十日兩軍ノ將官ハ昨日清人ト議スル所未タ回答アラサルヲ以テ翌
日健軍ヲ攻メシメ大尉トクニ氏ハ英軍參謀士官ト俱ニ地理探偵
ノ任ヲ擔任セリ
張家灣露營前方凡ハ五吉羅米突ヲ所ニ通州ハ大邑ナリ人口四十萬繞
ラズニ胸壁ヲ以テ或此地ヨリ北京ニ達スルニ長洲十二吉羅米突ハ花
崗石ヲ敷キテ道路アルト云フ
此道路ハ清代ノ建築ニ係ル河流ニ沿ヒテ平行シ白河ハ北京トヲ連絡
スル者ニシテ其有橋ヲ涉ルハ八里橋ニモ通スルニ云フ
瓜壁橋ハ前後ニ清將僧格林沁陣營ヲ居ルヲ通州ニ懸念セズシテ

九月廿一日
八里橋ノ戰

直隸其防禦線内ニ侵入セシ隙中ニ英軍ハ第一橋ヲ距ルコト三吉羅米突
佛軍ハ八里橋ニ直進シ英軍ハ左方ヨリ第一橋ヲ距ルコト三吉羅米突
ニアル沿河ノ第二木橋ヲ過キ敵兵ノ前後見リ之ヲ掩撃セシト云フ
將官ロリシト氏ハ河西務ニ留ル諸兵並ニ天津ヨリ來リ北京ノ儀仗ニ列スヘキ者ノ
内ニ騎乘砲三小隊ヲ選ミ之ヲ率テ十九日ニ來會セシメ以テ佛軍
ノ總員殆ト二千八百人ト云フ
二十日午前第五時佛軍ハ英軍ニ先テ發程シ其行李ヲ張家灣前方一
里ノ所ニアル村落内ニ置キ步兵ハ中隊ヲ留テ之ヲ護ヒシメ本軍進行
スルコト少許敵軍ヲ望ミ見ルニ健軍步兵ハウラクウエニ陣營ヲ設ケ
其騎兵ハ左右兩翼ヲ排開シテ其右方ニ於テ擴張ナル弧狀ヲ作ルカ如
シ(第七圖ヲ見ル)

佛軍ノ前衛

佛將水陸兩騎哨ノ地ヨリ距ルコト三吉羅米突ノ所マテ行進ヲ保績シ且
其開戦少準備ヲ爲メ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ
佛軍ノ前衛ハ重兵中隊輕步兵連中隊橋船兵ノ枝隊四斤砲中隊第十
四聯隊ノ第十中隊及ヒ騎乘砲三小隊ヲシテ將官コルノ一氏ノ統轄ニ
屬シ左方ニ英軍ヲ右方ニ將官ヲヤマシ氏ヲ置テ其中間ヲ進行シ而シ
テ隊連隊ノ將官ハ輕步兵殘餘ト火箭隊十二斤砲中隊第十四聯隊ノ第
九中隊連步兵第百三聯隊並ニ重步兵第百三聯隊及右翼中隊トテ以テ
其近地ニ於テ應援セリ
我時佛ノ前衛ハ少隊ヲ差方斜行進ルニ忽チ敵騎ハ大ニ至リニ遇
カ未タ英軍ノ望ミガ濟マテ將官ヲ殺シテ諸兵ヲ停メ諸砲
ヲ擲メテ戰騎ヲ作テ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ
其時佛司命邊將我カ砲彈ヲ敵線中ニ爆裂スルヲ認メ諸兵ヲ鼓舞シ益

前衛ト本軍
トノ分離

其地ヲ保支テ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ
同兵ノ參謀長交戦ノ地ニ來リ且以報テ其日ク我ウワクワウエ邑ヲ經過
セシカ該邑タル實ニ清軍防禦線ノ中央ニシテ橋梁ニ對シテハ眞ニ鍵
鑰トモ稱スヘキノ所ナリト其橋梁ハ該邑ヲ隔ルコト凡ソ千五百米突ノ
後ニアリ
此時將官ヲヤマシ氏モ亦砲兵及ヒ輕步兵大隊火箭隊及ヒ十二斤砲中
隊ヲシテ敵ニ向テ排開セシメ且以第百一聯隊ノ二大隊ヲシテ全ク右
方ニ列セシメタリ
此ニ於テコリノ一將官ノ部下ハ全ク孤立シ其勢甚ク危キヲ以テ本軍
ニ集合スヘキ命ヲ受ルト雖モ英軍ノ未タ戰線ニ至ラサレハ其地ヲ
退却シ能ハス既コシテ敵騎ハ益我兩翼ニ奮進シ僧格林沁氏モ奮進シテ
我カ狀勢ノ窘盛ニ乘テ掩擊ヲシテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ其隊ヲ分シテ

コリノ一將
官ノ防拒

前衛長健リシコリ氏此危急際ニ臨ミ諸方ノ攻撃ニ應スルノ智略殊
 ナリ發火ヲ以テ其眼前ニ集マル敵兵ヲ悉ク粉砕セシメ
 將官ウヤマン氏モ亦百リシコリ氏ノ一般ニ苦戰ヲ誘ヒカメテ防拒セサ
 ズテ得サルニ至レリ此際敵騎ハ我カ右方ニ繞リテ襲ハントシ敵ノ砲
 兵ハ前面ヨリ劇シク發射セシメ雖幸ニ我兵ノ額上ヲ越ユルコ
 最モ高ク爲メニ傷ガラズ者ナシ我カ火箭隊ニ連射中隊輕步兵及
 第百二聯隊ノ中隊等ハ鼓噪シテ敵騎ノ來襲ヲ防キ其中央ニ向テ掃
 攘セリ既ニシテ敵復々來テ我極端ナル重步兵第百一聯隊ヲ破ラント
 セシカ我佐ブシコリ氏ノ勇悍智略ヲ以テ之ヲ卻ル能ク得タリ
 我兵ノ防禦斯ク如ク猛勇ニテ毫モ屈撓ズルコト色ナキノミテラス砲
 彈數雖騎ヲ損傷スル殊ニ鮮カラサルヲ以テ彼ノ心膽漸ク沮喪シテ遂

敵騎退却

コリノ一將
官ウヤマン氏

巡シ狀アリ始ニ我騎右方潛避ケ後チ我銃丸ノ下チ潛行シテ左方ニ
 遁逃シテ我軍ニ向テ突進シテ我軍ニ突進シテ我軍ニ突進シテ我軍ニ
 此役ニ於テハ驍勇ナル敵將僧格林琿親カラ軍隊ヲ指揮シ我カ正面ヲ
 攻撃シ我軍ニ時甚危殆ナリ此時敵ノ騎兵モ我砲前方六十米突ノ所迄
 來襲シ我兵屈撓ズルコト色ナシ殊死防戰スルモ見天犯スヘカラサルヲ
 察シ遂ニ敗走スルヲ以テ大敵ヲ圍繞シ受ケル雖モ十八日役ニ如ク能
 ク之ヲ破リ至勝ヲ得テ我軍ニ大勝ヲ得テ我軍ニ大勝ヲ得テ我軍ニ
 英軍ハ我軍ノ左方ニ排開キテ佛將モ我軍ノ左方ニ排開キテ佛將モ
 カニ及ハサルヲ以テコリノ一將官ヲシテ其隊ヲ率井テ沿河ノ左方ニ
 進軍シ以テ敵兵ヲ其右方ハ里橋ニ驅逐シ其間シテウヤマン氏將官
 ハ敵將僧格林琿ノ旗章ヲ植ル橋梁ヲ目的トシテ正面チ攻撃セントス
 我軍鼓噪シテ進軍シ以テ僧格林琿ノ旗章ヲ植ル橋梁ヲ目的トシテ正面チ
 我軍鼓噪シテ進軍シ以テ僧格林琿ノ旗章ヲ植ル橋梁ヲ目的トシテ正面チ

ウエ邑正面
ノ攻撃

コリノ一將
官八里橋ヲ
拔ク

陣内ニ破裂シ其騷擾ヲ極メテ願ミテ隊伍整々無沙ヲ徐口ニ八里橋
ニ退キタリ
勝敗ノ機未ダ何レニフルヲ知ラズ唯其橋梁ヲ占領スルト否トヲ以テ
之ヲトセントス
將官コリノ一氏ハ砲兵ヲ左方ニ縱ツテ斜メニ敵兵ヲ擊破ス其間大佐
パンスマン氏ハ火箭隊及ヒ十二斤砲中隊ヲ前進セシメ彈丸ヲ放テ敵
軍ヲ衝突シ且ツ我軍ノ近接ヲ防カシトスル敵兵ヲシテ發射ヲ停メシ
ムルニ至レリ我歩兵ハ漸ク進テ沿河ノ民屋ヲ占メタリ
八里橋ハ古代ノ建築ニ係ル其偉麗宏壯ニ至テハ眞ニ人ヲシテ驚カシ
此時我カ歩兵砲兵ノ火力ニ敵セサルモ其軍容極メテ鮮明ナル敵兵ハ
身ヲ露ワシテ旗章ヲ翻シ應戰セリ

佛兵ノ野營

英軍ノ動作

是日午前奮勇防戦セテ敵騎ハ既ニ避匿シ唯其皇旗ヲ帶フル撰拔兵ノ
敵軍ヲ退卻ヲ擁護スルヲ最モ勉メタルヲ見タリ
其後三十分ヲ過キ我砲彈命中シテ大ニ敵兵ヲ殺傷スルヲ以テ遂ニ彼
ヲシテ發砲ヲ休止セシム
將官コリノ一氏ハ重歩兵第百一聯隊ノ一中隊ヲ前衛ニ加ヘ急ニ進テ
橋ヲ拔キ更ニ敵兵ヲ追撃シ北京路ニ進入セシヲ以テ佛將モントハン
氏モ亦諸兵ヲ引テコリノ一氏ニ繼グ時ニ正午ナリ
此日ノ戦争ハ午前第七時ニ始マリ敵兵ハ全ク意氣沮喪シ敗潰ノ餘戰
場ニハ死傷一千名ヲ棄テ逃レ去ル佛軍ハ留ルヲ二時間更ニ國都ヲ距
ル十八吉羅米突ノ地ニ進テ僧格林沁麾下ノ遺棄セシ天内幕並ニ舍營
ニ於テ布陣セリ
英軍モ亦其方面ニ於テ共ニ協力シ擔任ノ諸事ヲ了セリ

十月九日發ヒタル通信書類中、清國官吏其母ニ送ル書アリ其中
此役戰死セシ者無慮三千名ナリト記載ス此書ハ夜北京ヲ發シタ
ル韃靼驛夫ノ齎ス所ト云フ

英將シルフグランド氏ハ海軍ノ行李ヲ堆積セシ村落ヲ經過セシヨ
リ其縱隊ヲ左ノ順序ニ排開セリ

右方ハ我軍ニ交接スヘキ爲メアルムストロング砲ヲ配置シ左方及ヒ
後方ニハ、ハアンシナフノ第十五號第二及ヒ第九十九ノ聯隊海軍歩兵
二百名許九リーブル砲四門並ニ騎兵及ヒ六リーブルノ一中隊ヲ配置
セリ

此線ヲ以テ行進ヲ保續シ敵ノ右方ニ向テ轉回運動ス既ニシテ遙ニ我
軍ヲ掩撃セントスルノ敵騎ヲ望見セリ
英將シルフグランド氏ハ騎兵ノ全員及ヒ歩兵之ニ部ヲ以テ地平線

英軍ノ分離

英騎ノ襲撃

ノ眺望ヲモ遮蔽スヘキ敵ノ大軍ニ向テ進行セシニ由リ英軍モ爲メニ
全ク三部ニ分離セシ如ク其ニ一方ハ少將シムト氏ヲ指揮ニ屬シ
佛兵ニ近接シタル者其他方ハ英軍司令長官及ヒ少將ワルジヲシミチ
エール氏ト俱ニ在ルモ、兵員殊ニ衆ク遙ニ隔リテ獨立動作セリ
英騎韃兵ニ接スルヤ直ニ攻撃セシニ其經過ス可キ地上ニ障礙多ク殊
ニ土質固シカラステ風雨ノ餘車馬ノ運轉頗ル艱苦ヲ極メタリ且
第一列ノ如キハ塵埃ノ爲メニ兩眼ヲ開クヲ能ハズ誤テ壕中ニ落ル者
アリ其混亂雜沓ノ際十頭ノ馬匹逸走シテ敵軍ニ赴ク者アリ
韃靼兵ハ一般急襲ノ用ヲ講セサルカ故ニ前進シテ只其火繩銃並ニゴ
ンゴール砲ヲ放チ而シテ速ニ四方ニ散走シ遠ク逃避シ決シテ敵兵ニ
薄接ヒサルヲ常トス故ニ之ヲ追躡撃破セシ得ヌルを得カラス然レ
モ之ニ依テ死傷モ亦夥多ナラスシテ只二百名余ノ戰役ニ堪ヘサル者

英將シウト
佛軍ト齊
頭ノ所ニ來

英軍ノ舍營

アリシノミ
 英將シウトン氏ハ佛軍敵ノ圍ヲ受ケ大ニ苦戦スル際其左方ニ來援セ
 リ是レ佛軍ノ爲メニハ實ニ至幸ナリ
 佛軍ハ韃靼兵ヲ驅逐セシ後始メテ攻勢ニ轉スルヲ得此時英軍ハ木橋
 ニ向テ陸續進行セリ
 英軍ハ村落或ハ墓所等ヲ以テ挾ミ或ハ樹木ヲ列植シタル道路ヲ經過
 スルニ其村落或ハ墓所内ニ伏兵アルヲ察シ英ノ砲兵ヲシテ二三發射
 セシメシニ敵兵忽チ退走ス英ノ旅團ハ更ニ前進スルヲ得タリ
 斯ノ如クナレハ英軍ハ樹林ヲ越テ復タ樹林ニ移ルノミ步兵ノ發射ヲ
 要スルコトナシシルヲフランド氏ト同時ニ預定ノ點ニ至ルヲ得タリ
 佛軍カ河流ヲ涉リ對岸ニ達スル時ニ千餘ノ清兵北京ニ向テ走ルヲ見

木橋ノ製造甚タ脆弱ナルヲ以テ大砲ヲ運輸スルヲ能ハス故ニ英軍ハ
 敵ノ敗兵ニ向テ二三發スルノミニシテ其停止セシ點ニ於テ宿次セリ
 此日ニ至リ始メテ十八日以来ノ事ヲ完整シタルカ如シ
 此役敵兵中戰役ニ堪エサル者ハ千二百餘人アリ嘗テ土寇ヲ戡定セシ
 著名ナル敵將ヲヤンハアチ氏モ二重傷ヲ負ヒタリト云フ
 其他我軍ノ勝利ヲ示スヘキ者ハ青銅砲十七門ノ内精巧ナル蘭國製砲
 若干門價格林氏ノ旗章多數ノ火繩銃及ヒ矢箱並ニ石橋近傍ノ倉庫内
 ニ於テ火藥一万吉羅グラムヲ獲タルナリ我軍死傷二十名其内戰死三
 名英軍ハ唯其騎兵ノミニテ其數殆ト佛軍ト同一ナリ
 張家灣ニハ二万五千ヨリ三万ニ至ルノ韃靼兵アリ八里橋ニ駐在スル
 者ハ尙多カルヘシト云フ
 智勇兼備セル將軍ノ麾下ニ屬シ國都ノ防禦ニ殊死奮闘スル清國ノ大

兵モ僅ク歐兵數人ノ爲メニ全ク擊破セラル抑モ今回ノ役ノ如キ敵兵預メ其地ノ險易ヲ計リ要害ヲ設タルヲ以テ歐兵ハ常ニ不利ナリシカ其ノ能ク勝ヲ制セシ者ハ紀律整然ニシテ訓練素アレハナリ此レ勝敗ハ兵ノ衆寡ニアラスシテ軍紀訓練ノ可否ニ在ルヲ証スルニ足ルヘシ古昔羅馬人寡兵ヲ以テ多數ノ蕃夷ニ勝ツヲ得タリシモ亦故アルヲ知ル可シ

兩國ノ兵ハ北京ヲ距ル僅カニ四里ノ所ニ進ミタルカ故ニ僧格林貝敗ニ乘シテ直ニ北京ニ突入スルコト實ニ容易ナルカ如シト雖モ行軍ノ疲勞アリ且ツ前日ノ兩戰ニ於テ悉ク軍資ヲ消耗セ盡ニ由リ之ヲ斷行スル能ハス步兵ノ如キハ既ニ預備ノ藥包ナク砲兵ハ砲一門ニ僅々四十七發ヲ剩シ糧食ノ如キハ全ク欠乏セリ英軍モ亦稍之下均シキ情態ナリ兩軍ノ狀態斯ク然如キヲ以テ人員二百萬敵地ニ深入スルハ無謀ノ

九月二十二日ヨリ十月五日ニ至ルノ事業

同盟軍天津ヨリ援兵軍ヲ費徴ス

和議國書ノ往復

舉ニ屬ス故ニ兩軍將官ハ協議ヲ逐ク天津ヨリ兵員ヲ招集シ人馬彈藥糧食等全ク具備スルニアラテ遂レハ八里橋發大砲ヲ決シテ約ス九月二十二日ヨリ十月五日ニ至ル迄ハ此等ノ諸事ヲ整頓辦理シ且ツ此間清國政府ト數回ノ照會往復アリテ兩國ノ特派全權公使ニ書八里橋戰爭ノ後チ清帝ノ親弟恭親王ハ兩國ノ特派全權公使ニ書ヲ致シ例ノ如ク和好親睦ノ約ヲ結ハントスルノ衷情ヲ表シタリ其書ニ云フ曩ニツサア(懿親王)ハ時務ヲ處辨スルコト能ハス余ハ皇帝ヨリ講和ノ全權ヲ受ケ今將ニ條約ヲ結了セントス請フ兩軍我カ言ヲ疑フ勿レ云々ト然レハ張家灣ノ渝盟前ツサア(懿親王)ヨリ送ル所ノ書モ亦天津背約ノ張本タルクワエリシ氏(景亮カ)ノ反覆常ナキヲ縷述スルコト今回ト略相類ス故ニ同盟兩軍ニ於テハ其和ヲ請フ果シテ確實ナリヤ未ダ信ヲ措クコト能ハス其他恭親王ノ書中復タ前日違盟ノ罪ヲ謝セ

同盟軍俘囚
ノ解放ヲ請
フ清人之ヲ
辞ス

和復破ル

ス又一言ノ囚虜ニ及フコナク且ツ我カ請求ノ條件ヲ承諾スルノ語ナ
シ因テ以爲ヘラク是レ亦防戦ノ準備ヲ整頓シ或ハ國帝ノ避匿ヲ全フ
スル爲メ故ラニ此言ヲ爲スコ前日ノ如キニ過キサルヘシト
然レモ兩國全權公使ハ常ニ寛大ヲ主トシ答ヘテ曰ク囚虜ノ解放ヲ得
レハ一々其言ニ從ハント清人曰ク囚虜ヲ解放スルハ和親條約捺印ヲ
行フノ日ニ於テスヘシ其待遇ノ苛酷ナラサルコハ万々保証スヘシト
囚虜解放ノコニ至ラハ兩軍之ヲ論スル極メテ激昂ナリト雖モ清人ハ
固執シテ肯セサルニ由リ和親復メ破レ同盟兩軍更ニ北京ニ侵入セン
トスルニ至レリ然ルニ其囚虜ノ生命如何ニ至テハ未タ知ラサルヲ憾
ム只バアクス氏及ヒローク氏ハ清人ノ言フ所ニ從ヒ同國文字ニテ記
シタル書ヲ佛軍ニ送レリト雖トモ其書ニ載スル所ハ只清人ノ誠意ヲ
告ケタルモノニ過キサリ

佛軍ノ總員

英軍ノ總員

去月四日兩軍ハ天津ヨリ兵員軍資ヲ徵集シテ兵勢ヲ皇張シ佛軍ニテ
ハ重歩兵第百二聯隊ノ全兵及ヒ工兵一中隊四斤砲一中隊海軍歩兵二
百七十名來リ合セシカ故ニ歩兵三千五百名砲兵三中隊總員四千名並
ニ火箭六百ヲ有スルニ至レリ
英軍ハ第六十及ヒ第六十七ライフル隊ニツク騎兵殘餘皆少將ナアヒ
エール氏ニ屬シテ來會シ其總員佛軍ト稍同シ且ツ其他六十八コーブ
ルノ攻城砲ヲモ有セリ
兩軍ノ患者及ヒ傷者ハ總テ之ヲ天津ニ送致ス通州ノ一門ヲ取り之ヲ
諸物貯蓄所トナシ且ツ該地ニ市兵五六千人モアルヘキ算定ナルニ由リ
英將モルチアグランド氏ハ海軍歩兵四百名ヲ留メ以テ衛兵トナシ佛將
モルトハン氏ハ既ニ張家灣ニ重歩兵第百一聯隊中ノ一中隊ヲ備ヘ且ツ
同百二聯隊ノ二中隊及ヒ輕歩兵大隊等ヲ八里橋及ヒ通州ニ備ヘタリ

十月五日同
盟軍北京ニ
進ム

其近傍探偵

蓋シ此諸兵ノ部署ニ由リ天津ノ交通ハ水陸共ニ便利ニ備ヘ病院會
計部ヲ此ニ留メ唯其輕便病院ヲ五日間ノ糧食ヲ携行シテ
十月五日兩軍ハ北京ニ向テ進ミ所受訓令ノ極欵ヲ踐行スル將ニ近
此時英兵ハ戰列ノ右方ニ陣ヲ占メタリ
即夜ニ進テ國都ヲ距ルヤ五吉羅米突ノ所ニアル大邑内ニ露陣シタリ
其地高峻ニシテ鬱葱タル樹木之ヲ圍繞シ頗ル物産ニ富メルカ如シ茲
ヨリ敵兵ノ胸壁ヲ望ミ見ルニ數百ノ騎兵我カ前哨線ノ前面ニアリト
雖上流來襲スルノ意ナキカ如シ
諸方ニ派出セテ偵察隊ヲ報道並ニ其他得タル所ノ報告ヲ以テ之ヲ徵
スルニ北京ノ北部ニ一大陣營アリテ僧格林沁ノ營ニ供シ衆兵ノ團結
集合セル者スルハ稍ヤ確實ナルヲ以テ兩軍ハ謹且發程ニ北京ヲ攻ム

十月六日ノ
進軍

北京北部堡
壘攻撃

先テ之ヲ散亂シシメテ
十月六日拂曉兩國ノ將官ハ北京ニ向テ進ム兩軍並各自縱隊ヲ作り森
林ノ繁茂ニテ隱蔽多キ平地ヨリ迂曲ノ道路ヲ經テ前進セリ
午前第九時兩軍ハ北京ノ北隅ヲ距ルニ吉羅米突ノ所即燒瓶場ニ於テ
休憩セリ
其頂ニ登レハ北京ノ胸壁ヲ瞰視スルニ以テ佛將モ
率井テ前方ノ道路ヲ偵察セシメシニ同官ハ少頃ニシテ騎騎ノ大軍ニ
遇ヒ倉皇我軍ニ歸リ
其騎兵ハ後ニ現出セシメテ雖トモ復タ激戰アルヘキハ疑フハ
是ヨリ一時間ヲ經テ佛英兩軍ハ陣營ニ向テ併行シ將官
氏

正面ヨリ壘ヲ攻撃シ將官コリノ一氏ハ左方ヨリ背後ニ繞出スハ英軍ハ佛軍ノ右方ヨリ進出ントス
 兩軍ノ進行意外ニ拮取り殊ニ佛軍ノ行路ハ近キヲ以テ最モ迅速ヲ極メタリ既ニシテ佛將モントハン氏ハ英公使ロールエルン氏ノ騎馬ニテ來會セルヲ以テ同氏ト共ニ胸壁ニ登リ敵陣ヲ遠望セシメ敵兵ハ既ニ逃去スルカ如シ只露營ノ痕跡ヲノミ認メタリ
 此時英將シルチフグランド氏ハ間諜ノ報告ヲ以テ韃靼兵ノ圓明園ニ走ルヲ知り直チニ之ヲ追躡スヘキ意見ヲ佛將ニ通シタリ圓明園ハ國都ノ西北ニ當リ兩軍占領ノ地ヨリ若干吉羅米突チ距ルノ所ニ築造シタル清國皇帝ノ離宮ナリ
 進軍ノ時機漸ク迫リ諸兵モ勇氣勃然トシテ速ニ進發セントスルニ由リ佛軍ハ英軍ノ右側ニ殆ト弧狀ヲ畫シテ所定ノ方向ニ進ム凡ソ斯ノ

佛軍圓明園進ム

如キ樹木ノ繁茂シ迂回曲折ノ路ニ於テ若シ一步ヲ誤レハ其方向誤失スルヲ以テ諸隊ヲ離隔セサテシメンカ爲メ單一ノ縱隊ヲ作リテ進發セリ
 是日晴天點翳ナク太陽ノ光輝人ヲシテ目眩セシメ塵埃天ニ漲リ溟濛トシテ密雲ノ如シ且其到ル處家屋墓所ヲ以テ挾メル凹道ナルヲ以テ我軍チシテ殆ト方向ニ迷ハシメタリ
 午后第二時僮父一名ヲ得テ嚮導トナシ縱隊ノ先頭ニ在ラシメ少佐カシヘン氏ハ其指示スル所ニ從ヒ軍隊ヲ進行セシム
 此時軍隊ノ疲勞極メテ甚シク休憩ヲ要スルト雖モ尙勇ヲ鼓シテ行進セリ
 午后第四時佛ノ前衛ハ英將ハアトル氏所轄ノ騎兵一隊ニ遇フ其隊ハ英將シルチフグランド氏ト相失セシニ由リ之ヲ探索スル者ニシテ佛

佛隊英騎ニ遭フ

軍モシルヲフグランド氏ノ在ル所ヲ知ラス因テハアトル氏ハ佛將モ
ントハン氏ト謀リ佛隊ニ繼テ進ミ所定ノ集會地ニ至リ其首將ニ遇フ
トニ決セリ

午后第七時軍隊一村ヲ通過セシニ住民等皆驚怖シ急ニ家屋ヲ閉鎖ス
是ヨリ壯麗ノ一橋ヲ過キ花崗石ヲ敷設セシ道路ヨリ大樹ヲ併植セシ
原野ニ出テ益進ミシニ清國皇帝納涼苑ノ前ニ達セリ

此離宮ノ門戸ハ極メテ堅固ニシテ左右ニ木柵ヲ設ケテ之ヲ鎖シ韃靼
兵ハ多ク其後園ニ屯集セルヲ以テ佛將ハ露陣スルノ前先ツ偵察ノ必
要ナルヲ察知シ速ニ海軍ノ二中隊ヲ遣ハシ少佐カンヘノン氏ヲシテ
之ヲ指揮セシム

海軍大尉ヒナア氏ハ第一庭内ニ於テ人語ノ喧囂ヲ聞テ以テ速ニ
開門スヘキ由ヲ令スト雖トモ之ニ應セズ乃チ海軍生徒ヒナア氏ト

佛兵圓明園
ノ前ニ至ル

佛將納涼苑
ノ第一庭ヲ
占ム

共ニ壁上ニ梯ヲ攀登セシニ槍劍弓矢火器ヲ携帯スル若干ノ敵兵兩
氏ヲ見テ倉皇逃亡セシカヒナア氏ノ獨リ先ヲ入ルニ及ヒ更ニ反リ擊
ントス

是ニ於テヒナア氏ハ短銃ヲ放ツテ之ト戦ヒ左手ト右拳ニ傷ヲ負ヒシ
カ幸ニレテ海軍歩兵ノ來リ援フ者アルニ由リ兩氏ハ万死中ニ一生ヲ
得タリ此時ヒヘノン氏モ亦其脇下ニ傷ク

其争闘モ暫時ニシテ終リ敵兵ハ傷者數名死者三名ヲ棄テ逃亡セリ

發砲ノ聲樓閣森林ニ響キ暗ニ佛將ノ來援ヲ促セル者ノ如シ是時將官
ヨリノン氏ハ第一内庭ニ來ル以爲ヘラク未タ武備ノ如何ヲモ詳カニ
セサル建築物ニ對シテ夜中攻撃ヲ行フハ極メテ危殆ナリシト唯其位
置ヲ固守シテ翌日ニ至レリ

其夜無事ニ過キシモ未タ英軍ノ消息ヲ知ル能ハス然ルニ英軍カ北京

英軍ノ状態

ノ北方ナル壁障ヲ其右方ヨリ襲ハント佛兵ト分離セシ後ノ状態ハ左ノ如シ

兩軍預定ノ畫策ニ從ヒ英軍ハ其壁障ノ前方ヲ過クルヲ三或ハ四吉羅米突ニ至リ路ヲ左方ニ取リテ轉進セシニ森林ノ繁茂隱蔽極メテ甚シク二百米突以外ハ眺望スル能ハサルノ地ニ至ル其邊ノ道路屢迂回曲折スルヲ以テ遂ニ進路ヲ失フ此時其右方ニ韃靼騎兵及ヒ其陣營等ノ痕跡ヲ認メタリト云フ

英將シルチフグラント氏ハ進軍ノ初メヨリ騎兵ノ大部ヲシテ敵ノ退線ヲ截シメントシ之ヲ側面ニ派遣ス其麾下見兵ハ纔カニ道路ノ搜索ニ供スヘキ龍騎兵ノ數人ノミ

英將シルチフグラント氏ハ其得タル諜報ヲ佛將モントハン氏ノ許ニ送り佛隊ノ其南北方向ニ出ルヲ待チシカ其地ハ隱蔽スルヲ以テ竟ニ

北京北方英軍ノ布陣

佛隊ヲ見ルニ能ハズ

英將ハ其隊少シク西南ノ方ニ傾斜セシカ午後第二時ニ至リ壁障ノ下ニ達スルヲ得タリ其障内猶或ハ清兵ノ嚴守スルカト疑フ

然ルニ障内一兵ノ之ヲ守ル者ナキヲ以テ其内ニ突入シ國都北部ノ南門ニ面スル所ニ於テ停止セリ

茲ニ一大路ノ其門ニ通スルアリ門後ニハ一大邑アリ邑内若干ノ敵騎アルヲ認ルヨリ直チニ砲二門ヲ以テ戰列ヲ作りシカ韃靼兵之ニ應スルコナクシテ退走シ其一部ハ國都ニ向テ遁レ一部ハ壁障ニ沿フテ退走セリ

英將ハ敵來襲ノ恐レナキヲ以テ其兵ヲ露營セシメ以テ佛兵ノ位置並ニ前條説ク所ノ佛兵ニ從ヒ圓明園ニ赴キシ同軍騎兵ヲ安否ヲ知ラシト欲ス英兵ハ騎兵ヲ現在スル者鮮キヲ以テ偵察隊ヲ遣シテ深入搜索

佛將圓明園
ニ着セシナ
英將ニ報ス

モ該山能ハ勢只壁障上ニ火ヲ點シ又七日午前第五隊大砲三十發
シ英兵團所在ヲ知ラシメタリ佛營ニテハ能ク悉其聞テ得タリ
某云フ爾來佛兵ノ營ニテハ其ノ營ヲ守ルニ力ヲ盡シテ居ル
佛將モントハン氏ハ英將ハアトル氏ト協議シ英ノ司令長官並ニ其外
交官ヲシテ前日ノ事情ヲ知ラシメ且ツ兩氏等ヲ圓明園ニ招カント欲
シ既ニ之カ處分ヲナシ又館内ヲ巡視セシトス
佛將モントハン氏ハ事實ノ齟齬ヲ盟約ニ悖戻スルヲ惡ク又度量ノ廣
大ナク示シ其讒誘或ハ娼妓ヲ絶ント欲シ同盟兩軍同時ニ館内ニ入
ルヘシト定メヌリ或ハ云フ英人ハ獨以張家灣ニ於テ多量ノ物品殊
該邑ニ收藏スル無慮四百萬斤ノ茶ヲ掠奪セリト云フ
歐洲人未ダ嘗テ圓明園ヲ見タ者アラズ蓋シ歐洲中如何ナル官殿
亦雖モ之比擬スルコト能ハサルナリ園中花塢湖水等廣袤四里餘

官殿ノ巡覽

監視委員ヲ
設ク

殿所附參差連亘其宮殿屋宇悉以白理石造以テ構造瓦露總埃諸
種ノ畫彩ヲ施シ房舍ハ總テ異形ナク華麗佛像ヲ畫キ塔樓ハ其形狀
奇巧ナシ庭園亦巧景景色ヲ裝ヒ眺望ノ美ナル具ニ人ヲシテ一見去
ルニ忍ヒカラシム之ヲ概言スルニ壯麗精巧ノ淵藪ニモ東洋風俗
盛況ヲ現ハス實ニ其妙極ナク云フ
各佛堂内ニハ珍奇重寶累積重疊シ其景况真ニ驚クヘク清國皇帝天下
ノカヲ傾ケ親カラ之ヲ經營スルニアラサレハ決シテ斯ク如キ宏天偉
麗ヲ寶庫ヲ建ル能ハサルナリ
珍品奇貨散亂狼藉觀ル者ヲシテ感慨ニ堪サラシム其纒カニ破毀ヲ免
カレタル者ハ唯皇帝ノ便殿ノ内ニ在リ
佛將モントハン氏ハ室内ヲ檢テ諸所ニ步哨兵ヲ配置シテ英將
ヲグラント氏並ニ英國全權公使ロールエルシヤ氏ヲ來ル迄ハ

英兵ノ來着
佛英兩國監
視委員

殿内ニ得シ
俘囚ノ物品

タモ手ニ觸ルコトヲ許サズ砲兵大尉シヨルニル並ニゴットツノ兩氏
ニ命レ之ヲ監視セシム兩氏匪勉能ク其職ヲ盡シ其間ハ一物ノ位置ヲ
變換シ或ハ顛倒セシモノナシ而シテ其初メアリ終ナキ實ニ遺憾ト謂
フハシ
第十一時三十分英將及ヒ英全權公使等圓明園ニ着レフリーブ並ニシ
ヨルシエル兩氏ニ属スル兩國ノ委員ヲ設ケ珍品奇物ヲ平分シ佛英兩
軍ニ交附セントス然レモ運輸車ニ定限アレハ悉皆運送スルコト能ハス
第七日ノ夕便殿ニ於テ同盟兩軍諸物品ヲ分ツ佛將モントハン氏ハ最
モ珍奇ノ物ヲ選ミ佛國皇帝皇后及皇族ニ獻呈セントス英將モ亦其女
王殿下ノ爲メ珍寶ヲ撰ヘリ
八日許多ノ金塊銀塊ヲ得之ヲ分配委員ニ附シテ糶買セシメタリ
圓明園ハ悲惨ノ狀極メタリ其便殿ニ連テ屋舎ノ内藏於テ我カ囚虜

十月九日圓
明園ヲ發ス

北京北方ノ
佛營

ノ携帶セシ物品ヲ發見セリ其囚虜ハ即張家灣ニ於テ清大倫盟ノ際生
擒セラレタル者ナリ
其物品ハ砲兵大佐フーロングラントン氏ノ被服病院附計官アレ
ル氏ニ属スル手帳及ヒ馬具英兵シツク隊ノ鞍十五脊等ナリ
然レモ我囚虜ノ死生存亡ニ至テハ未タ之ヲ知ル能ハス
此宏大壯麗ノ官殿ヲ組織セル紆餘曲折ノ房舎ヲ悉ク檢セサレハ未タ
全ク搜索ヲ了リタルト謂フヘカラス然レモ稜糧次第ニ欠乏スルヲ以
テ十月九日佛將ハ先ツ一時北京南北ニ布陣スル英兵ニ接近スヘキ爲
メ退卻ヲ行フコトニ決シタリ英兵モ亦其騎兵ト集合シタリ
佛軍ハ曉ヲ冒シテ發シ英軍ノ陣所ヲ距ル三吉羅米突ノ所ニ至リ安定
門ニ赴ク所ノ大道ニ露營セルニ由リ兩軍ハ全ク國都ノ北方外郭ノ内
ニアリ

佛將ノ該地ニ着スルヤ英將シルチフグラント氏ヨリ俘囚ノ歸還セシ
 ナ報セリ乃チ英軍ニ在テバアクス氏及ヒローク氏佛軍ニ在テハ大尉
 シヤノワン氏ノ傳令兵タルデスガラステドロウチウセルロセツト及ヒバ
 アセエレ―並ニ兵卒ギ子フト及ヒヘテツトナリ此數氏ハ酷虐ノ處分
 ナ受テタル疵痕ヲ存シ其譴責極メテ殘忍ナルヲ知ラレメ又諸囚人各
 其居所ヲ異ニシタルヲ以テ其擒セラレタルヤ否ヲ互ニ知得セスト云
 フ今此諸氏ノ話説ヲ聞ニ及ヒ未ダ赦宥ヲ得サル者ノ運命如何ヲ想像
 スレハ眞ニ人ヲシテ痛歎ニ堪ヘサラレム
 是ニ於テ講和條約中ニ囚虜ノ尸體ヲ贈與スヘキ條款ヲ增加セサルヘ
 カラス
 此増補ノ條款ニ從ヒ十月九日ヨリ十八日迄ニ其首足ヲ異ニセシ六名
 ノ骸骨ヲ得テ即チ大佐ウーリンドグランドンヤン氏會計官ヲ

氏副監督ウヒウ氏使役ゴチチヨウウツツ及ヒ烈ランケンホ
 而シテウツツ僧ノ尸ハ之ヲ得ルヲ能ハサリ其後吾聞ク所ニ據ヒ
 之ヲ八里橋ニ殺シ河中ニ投ス云フ故ニ佛軍囚人ノ殺サル者總計
 六名ニシテ英軍囚人二十六名中生還ヲ得シ者僅ニ十三名ニ過キス
 此際未ダ清廷ト同盟軍トノ間和好ノ確定セシ証左ナク兩軍司令長官
 ハ時既ニ冬ニ至リ寒威漸ク加ルヲ以テ急ニ事ヲ了セシヲ企望セリ
 十月十日兩軍司令長官書ヲ恭親王ニ致シテ曰ク十月十三日正午ヲ期
 シ安定門ヲ開キ我兵隊ヲ都城内ニ導クヘシ若シ之ヲ肯セサレハ我發
 砲シテ之ヲ擊破スヘキヲ
 恭親王ニ報スル所ノ趣旨ハ前條ノ如シト雖トモ實際ヨリ之ヲ論スレ
 ハ其峻嶮ノ城郭階梯ヲ登攀スルコト容易ナラス因テ十二日ヨリ十三
 日迄ニ攻城工事ヲ開キ電勉努力シテ速ニ其功ヲ竣ヘシトス

破壞隊ハ砲兵二中隊ニシテ其一ハ英ノ六十八リール砲四門其二ハ佛ノ十二斤忽微砲四門ニシテ安定門ト城郭ノ東北隅トノ間ニ備ヘ英砲兵ハ地壇ト稱スル所ニ在テ都城ヲ距ルヲ殆ト二百五十米突ニシテ佛砲兵ハ大凡七十五米突ノ所ナリ

城郭内ニ屯集セル鞆韃兵ノ眼前ニ於テ障碍ナク攻城ノ工事ヲ竣ヘ之カ爲メ派遣セシ偵察隊モ城郭ノ基脚ニ至ルヲ得ルハ眞ニ意外ノ幸ナリ我カ軍區々ノ砲隊ヲ以テ壯大無比ノ城郭ニ向ヒ攻撃ヲ試ルヲナレハ清兵皆之ヲ野蕃視シ胸壁上ニ登リ我軍ヲ俯瞰シテ輕侮ノ狀アリ

十二日夜ヨリ十三日ニ至リ調停ノヲニ幹當セル清國官吏コンギカ
佛英兩國ノ委員ニ應接シ安定門ヲ交附セシメタルノ由ヲ報セリ
參謀少佐カンバノ氏及ヒバアクス氏ハ其應接ニ任シ英軍布陣前方ノ村落於テコンギカ
恒貴ヲ見テ辨論刻ヲ移セリ此時コンギカハ勉

清官吏恒貴
佛英官吏ニ
應接ス

安定門ノ受
領

メテ兩軍委員ノ請求ヲ破ラント試ミシカ事行ハレヌ竟ニ兩國請求ノ諸件ヲ承諾スルニ至レリ
十三日正午即チ所期ノ時刻ニ於テ清人安定門ヲ開キ我兵ヲ迎フ兩軍ノ一大隊進テ城郭上ニ旌旗ヲ植ツ
佛兵ハ重歩兵第百一聯隊ト其聯隊長タル大佐フーシエス氏及ヒ其參謀長等先登シテ我兵ヲ安定門ニ誘セシガ皆テ帝王万歳ヲ唱ヘテ競ヒ入ル此時都民群集シ觀ル者堵ノ如シ清國官吏ハ人民ノ感憤激動スルヲ恐レ務メテ之ヲ鎮撫スト云フ
胸壁ハ幅十七米突許ニシテ巨日精巧ノ青銅砲數門其他無數ノ小砲ヲ裝置セリ然レモ彈藥ノ貯蓄ニ至テハ之ニ稱ハサルニ似タリ初メ開戦ノ時ニ當リ清軍ハ彈藥ニ富ム者ノ如シ而シテ漸次ニ欠乏セシト且ツ兩軍直ニ圓明園ヲ占領スル等遂ニ清人ヲシテ城下ノ盟ヲ爲サシムル

兩軍將官ノ
戒慎

北京ニ於テ
冬日屯營ノ
考案

佛將ノ異議

ニ至レリ
 兩軍ノ將官ハ相議シテ機ヲ失ハス警戒ノ方法ヲ定メ胸壁上各砲四門
 ヲ配置シ安定門ニ達スル大路ヲ射撃スルノ備ヘテサントス此時佛
 兵ハ都市ニ接シ韃靼營ノ近傍ニ布陣セリ
 會英國ノ全權公使ハ北京ニ於テ三冬ヲ過シヘキ考案ヲ出セリ
 英全權公使ハ和約成ルノ後ト雖トモ尙ホ兵力ヲ要スヘシトノ意ニテ
 此事軍略上ニ障碍ナキカヲ兩軍將官ニ諮問シ其議決ヲ得ントス
 英將シルチフグラント氏ハ同國公使ノ考案ヲ非トシ佛將モントハン
 氏ノ之ヲ辞シタルニ同意セリ
 佛將ハ其隊健康上ニ於テ北京ニ滞留スルヲ能ハス十一月一日ヲ限リ
 此地ヲ去リ天津府ニ至ルヘキヲ主張セリ蓋シ北京ニ滞留スヘキ準
 備ナク天津ニハ護寒ノ具全ク整理セルヲ以テナリ此際秋盡キ寒來ラ

清人確答ノ
延滯

兩國全權公
使復タ國書
ヲ送ル

隨兵所在ノ
報ヲ得ス

ントシ諸山岳ハ皆雪ヲ戴キ加フルニ北風凜々メリ土人皆曰是レ雪
 降ルノ徵ナリト佛軍之ヲ聞キ退去ノ意益切ナリ
 兩國ノ外交官ハ敢テ怠ルコトヲサレモ其和約ニ係ル照會ニ日子ヲ費
 シ果シテ十一月一日ヲ以テ諸兵ノ退去ヲ得ヘキヤ否ヤヲトスル能ハ
 ス
 其決議ノ甚タ遷延スルニ困倦セシ兩國公使ハ將官等ノ意ニ從テ更ニ
 國書ヲ送リテ曰ク來ル二十三日ヲ以テ和約ヲ實行スヘシ否ヲガレハ
 佛英兩軍直チニ府内ニ騫進シ皇宮ヲ燒燬スヘシ此二ノ者其擇フ所ニ
 任スヘシ但シ住民兩軍ニ抗スルニ非レハ我軍秋毫モ之ヲ犯スナカ
 ルヘシト
 此時ニ當リ僧格林沁部下ノ韃兵ハ陣ヲ何ノ地ニ設タルカ詳ナラス或
 ハ云フ北京ヲ距ル六里ノ所ニ退キタリト或ハ云フ北京ヲ距ル四十里

程則皇帝ノ遁逃セシ韃靼地方ニ潛匿セリト(此卷末ノ附録ニ掲ケタル納涼苑ニ於テ得タル所ノ建白書ヲ參照スヘシ)右ニ說中孰レカ其實ヲ得タルヲ知ラサレシ韃靼兵ノ瞻落チ氣沮ミ復タ防禦ノ念ナキハ稍ヤ信ヲ措クヘキモノニシテ兩軍曩時二度マテ擊破セシ彼ノ無數ノ步騎ニ再ヒ遇ハント欲スルモ得ヘカラス

兩軍意見ヲ異ニス

佛將モントバン氏ハ國書ヲ以テ告ケシ期限ノ盡ルヲ俟テ再ヒ攻撃セントシ姑ク其位置ヲ墨守ス然ルニ英將シルチフグランド氏殊ニ英全權公使ロールエメシヤン氏ハ憤激氣勢ヲ張り武威ヲ以テ清國ノ皇統ヲ易ルノ事マテモ論及スルニ至レリ
佛將及ヒ佛全權公使ハ同心協力唯預定ノ訓令ヲ遵奉スルニ止マリ敢テ英人ノ論議ヲ贊成セス抑英人ヲシテ斯ノ如キ激論ヲ生セシムルノ源因ハ一ニシテ足ラス九月十八日ニ於テ清廷兩國ノ擒囚ヲ生還スヘ

英全權公使
圓明園ヲ燒
カントス

キハ至當ナルニ多クハ之ヲ殺シ只其尸ヲ送ルノミ又英國ノ輿論殊ニ龍倫新聞ノ如キハ是事ヲ論スル極メテ激切ナルヲ以テ英公使ハ是等ノ爲ニ煽動セラレ遂ニ此ニ至ルナリ蓋シタイムズ新聞社探報委員ニテ有名ノ記者ポールピイ氏モ亦罪難人中ノ一人ナルヲ以テ此新聞社ハ其讎復ヲシテ衆情ヲ慰撫セント欲ス是レ論說ノ最過激ナル所以ナリ
英佛執ル所ノ主義各異ナルヲ斯ノ如シ故ニ此點ニ於テハ同盟兩軍一致セス
兩國ノ全權公使ハ嘗テ天津ニ於テ締了セシ講和章程ニ罪難人ノ遺族扶助トシテ佛ニ二十万テール即チ百六十万フランク英ハ其人員多キヲ以テ三十万テールヲ交附スヘキ一條ヲ添加スヘキニ議決セシカ十七日以後ロールエメシヤン氏ノバアロングロウス氏ニ報スル所ニ據

レハ清人淪盟ノ罪ヲ後世ニ傳ヘンカ爲メ記念碑ヲ天津ニ築造シ且ツ
 圓明園ノ全部ヲ燒燬スヘキヲ載ス蓋シ圓明園ノ一部ハ我軍既ニ之ヲ
 燒キ一部ハ七日八日ニ於テ清兵自ラ之ヲ燒ク第一項ノ如キハ清廷沮
 喪畏縮ノ餘ニ非レハ甘心セサル所ナレハ佛公使ハ利害ヲ指摘シ百方
 論辨漸ク英人ヲシテ之ヲ施行スルノ念ヲ絶タシメタリ第二項納涼苑
 ヲ燒ク事ノ如キハ唯一時雪辱ノ念ニ發スル者ニシテ到底説諭ノ及フ
 所ニアラサリシ

佛將之ヲ行
 フヲ辞ス其
 說明

佛將モントハン氏ハ同國全權公使ト同ク前項ノ事ヲ施行スルヲ辭シ
 タルハ其意蓋シ之ヲ施行スルハ皆佛國ノ政略ニ害アルニシテ恭親
 王ガ漸ク衆情ヲ鎮撫セシムモ死灰再燃ノ患アルベシ且佛將ニ締結セシ
 トスル和好ヲ一舉ニ破ルベキヲ以テ結果シテ然ラハ皇宮ヲ攻撃
 スルハ亦己ヲ得ザル所ニシテ清帝ハ顛覆ニ至ルハ復英知ル

英人之ヲ燒
 クノ趣旨

佛人告ル所ニ趣旨ノミニ違ハ殊々英人ヲシテ全ク其念慮ヲ絶タシム
 此ニ足ラサルカ如シト雖トモ英人中ニ於テモ之ヲ斷行スルハ誠ニ
 佛人ノ怨ヲヘキ結果ヲ生スルニシト思惟スル者ナキニテ且ツ其賊
 徒ヲ竊ニ上海ニ誘引スルノ嫌忌等アリテ多少其暴舉ヲ控制シタルカ
 如シ
 英人ノ論旨ハ兩國ノ俘囚慘毒ノ汚辱ヲ受ケ三日間手足ノ縛ヲ解カス
 且ツ飲食ヲ與フルヲナキモ皆圓明園中ニ於テス斯ク如キ人身ノ權利
 ヲ全ク剝奪シ非常ノ汚辱ニ對スルニハ永世ニ傳フヘキ一舉ヲ以テ
 之ニ酬フルニ非レハ英國人民決シテ甘心セス且ツ若シ彼等ヲシテ唯
 講和條款ニ捺印セシムルニ止マラシメハ未タ以テ清廷驕傲ノ心ヲ折
 クニ足ラス彼必ス俘囚ヲ殺害セシテ以テ得策ト爲サン故ニ圓明園ノ
 官殿ヲ認メテ要塞ト做シ之ヲ破壞スルハ敢テ其人民ヲ虐スルニ非ス

十月十八日
英兵納涼苑
ヲ燒ク

英人ノ新考
案

シテ清廷ヲ懲罰スルナリ寛仁ヲ主トシ施サントスルモ之ヲ捨テ他ニ
爲スヘキ者ナシ云々ト
十八日英ノ一師團ハ數日前マテ宏大壯麗ニ驚キタル圓明園ノ房室等
ヲ火キ悉ク烏有ニ歸セシメタリ
圓明園ノ燒燬ハ清廷トノ和議上大ニ影響ヲ及スナリ顧リミス英ノ外交
官ハ尙ホ新ニ考案ヲ出ス此件ハ佛將ヲシテ講和ノ再ヒ破レンコトヲ憂
慮セシムルニ至レリ初メ恭親王ニ送ル所ノ國書中ニハ二十日ヲ過キ
テ確答ヲ得サレハ二十三日ヲ期シ開戦スルノ約ナリシカ英人ハ尙ホ
其期限ヲ縮減シ十九日ヲ限リ確答ヲ得ント欲セリ若シ清廷ニ於テ我
請求ヲ肯セサレハ翌日ヨリ攻撃スヘシト主張セシニ佛將モントハン
氏ハローレルエルシヤン氏ノ暴舉ヲ非トシ英將ニ説テ曰ク佛軍ニ於テ
ハ二十三日前ハ決シテ攻撃ヲ爲ス可カラスト因テ其事中止セントス

清官吏條約
ノ捺印ヲ肯
ス

十月二十四日
日英清講和

清國官吏モ罹災者ノ遺族助金ハ五十万テトシ既ニ之ヲ承諾シ速
之ヲ賠償セントス二十日ノ朝恭親王ヨリ悉ク兩國請求ノ諸件ヲ許
且僧格林沁及ヒユウリンヌ兩氏ノ官ヲ褫フテ貶絀セシ由ヲ兩國公使
ニ報知セリ蓋シ兩氏ハ軍隊ノ總督ニシテ九月十八日渝盟ノ首唱ナリ
廿三日我カ請求セシ償金全額ノ交付ヲ了リ和約ノ信書交換ノ準備全
シ整ヒ且ツ清帝ノ批准押璽ヲ得タルヲ以テ廿三日恭親王ヨリ之ヲ報
知セリ兩國ノ全權公使ハ府伯ヨリ供スル一館内ニ移レリ
其和約捺印ノ式ハ英ハ二十四日佛ハ二十五日ニ於テ之ヲ舉ク此儀式
ノ際ハ軍容極メテ鮮明極メテ森嚴以テ清國人民ノ暴舉ヲ抑制シ彼ヲ
シテ復ダ抗スヘカラサルヲ知ラシム
シテ復ダ抗スヘカラサルヲ知ラシム
兵百名乘馬シテ五十名各五百名宛ノ二聯隊及ヒ徒步シツク兵一隊

佛ノ儀仗兵

兵皆奇服装皆鮮麗去リ... 公使ハ轎輿ニ乗シ服装美麗ナル昇夫十六名代之ヲ擔ヘリ... 二十五日第十一時佛將モンパハン氏及ヒ佛全權公使バアロンクロウス氏ハ恭親王ヲ接待スル所ノ天主堂ニ詣ル... 遠征軍中ノ諸種兵ヲ以テ編制セシ一隊儀仗兵トナリス... 其固有ノ赤袵ヲ着テ新鞍鞍ヲ携フ輕歩兵ハ裝具整齊トシテ蒼色ノ被布アル兜ヲ着テ騎乘砲兵一大隊ハレエスリ香クワリハ正船ニテ亡失スル者ハ代ユルニ上海ニ於テ新製セシ服帽ヲ以テシ歩兵ハ戰時服裝ニシテ其軍容實ニ鮮明ナリ蓋シ群集シテ品評ヲ下スヲ好クシ清國人民正必聳觀セシナルベシ... 佛國儀仗兵ノ斯ク軍容鮮明ナル者ハ英兵ト競ヌ然レテ亦唯其固有ノ服裝ヲ用ルルニ止ルニ止ル清國人民群集中テ徐歩シ隊伍整然トシテ

北京ノ景况

鞦韆市街ヲ過キ過リ時ニ儀仗兵ヲ觀ル者道路ニ填咽シテ殆ト並雖モ地ナリ清國官吏等ハカメテ軍隊ノ通路ヲ開クヲニ從事シ頗ル困ムト云フ北京ノ鞦韆市街ト支那市街トニ區分シ甚ク汚穢ニシ隣家屋モ亦陋ナリ唯二三ノ塔樓殊ニ美麗ナル磚造ノ周郭アルヲ見道路モ亦極テ不潔ニシテ塵埃常ニ堆積シ降雨數頃ニシテ泥濘忽チ深シ大車... 外郭ノ周圍ハ甚ク廣濶ナリ北門ヲ出テ、鞦韆市街ト支那市街トニ界スル胸壁ニ接スル外務官衙ニ至ルニハ殆ト一時三十分ヲ費スル云々恭親王ハ皇帝ノ親弟ナリ春秋二十四五歳ナルハ見ユ面貌温和ニシテ風采アリ佛公使ヲ接待スルニ諸省ノ長官及ヒ諸色ノ紐釦ヲ着ケタル諸大臣官吏ハ其右方ニ坐シ佛特命全權公使ハアホシクハ右氏及ヒ佛將モンパハン氏ハ其左方ニ列セリ(清國ニテハ左ヲ以テ上席トゾ)條約信書交換及ヒ其押印等ノ儀式ニ殆ト一時間ヲ費シ佛國使爲多

十月二十五日清佛講和

耶蘇教堂ノ
搜索

舊教ノ寺院
及墳墓ノ交
附

ニハ最モ好結果ヲ得タリシヲス恭親王ヲ新元益親密ノ友情ヲ表
セシメタリ講和ノ條約既ニ成リシヲ以テ城郭ニ備ヘタル砲門ヨリ二
十一發ノ祝砲ヲ行ヒ諸軍ヲシテ普ク遠征ノ目的ヲ達シタルヲ知ラ
シム

此和約押印ノ數日前ヨリ北京府内ノ耶蘇教堂ヲ搜索セシメタリ露西
亞公使將官イガチーフ氏ノ報道ニ據レハ氏韃靼市街ト支那布街ト界
スル所ニ葡萄牙ノ舊教堂アリ往古教長マテウリシイノ經營スル所ト
云フ又城郭外西方ニ壁ヲ以テ圍繞シタル舊教徒ノ一大墳墓アリ其内
古代清帝ノ崇敬スル教長等ノ墓碑ハ皆大理石ヲ用タリト云フ
此墳墓ヲ保護スルコトハ清國人民ノ死者ニ表スル敬禮ヲシスルハ
數年前ヨリ清國中ニ在留スル露西亞教會ノ義務ナルベシト云フ
清廷ニ於テ寺院及墳墓ヲ佛兵ニ交附スルコトヲ許ス故ニ北京在留ノ

十月廿八日
佛人俘囚ノ
送葬

十月廿九日
墳墓ニ於テ
法會ヲ設ク

僧ハ一氏ヲテ之ヲ接受セシメントス同氏ハ同國兵ノ誘導ニ由リ
十五年ヲ經テ始メテ寺院ニ還ルヲ得タリト云フ

十月二十八日佛軍ハ向ニ其兵ノ清國ニ俘囚タル死者ヲ舊教寺院中ニ
埋葬セタルヲ以テ此地ハ全ク佛ノ所管タリ

葬儀ハ極テ盛ニシテ清國人民モ來觀スル者殊ニ多ク死者六名ノ遺骸
ハ各白十字架ヲ帶ヒ砲車上ニ載セ天鵝絨ノ布ヲ以テ之ヲ掩ヘリ其前
日英軍ニテ葬送セシ時佛國士官ノ之ニ會セシ者多キヲ以テ此日英軍
士官モ亦多ク會葬セリ露西亞教僧英佛清ノ教僧等亦盡ク來會シ人員
最多ク皆ナ此悲惨ノ喪儀ニ列セリ其讀經ハムリ僧及ヒ軍隊僧長ト
レガアロ一兩氏之ヲ爲シタリ

翌日佛公使及ヒ遠征軍諸部ノ代理者ハ死者ノ墳墓ニ至リ法會ニ列セ
リ其讀經セシトハ聯隊ノ音樂ニ雜フルニドミス、サアフム、フアタ、ア

ヘラトレム(勝者地下ニ瞑セヨ)ヲ以テ會集諸人ヲシテ一層ノ感覺ヲ起
 サシメ恰モ佛國寺院ニ在ルノ想アラシム工兵其他諸兵及諸僧等ノ力
 ナ以テ三十年以來荒廢セシ此寺院ヲ挽回スルニ至レリ
 和約條款押印ノ後總テ戰爭ニ關スル事件ハ全ク局ヲ結ヒ佛英兩國ノ
 請求セシ者悉ク清廷ノ承諾スル所トナレリ
 千八百五十八年六月二十七日締約ノ條款ハ猶其効力ヲ有レ當時清國
 ヨリ佛國ニ賠償ス可キ額ハ二百萬テールナリレカ更ニ之ヲ増シテ八
 百萬テールトシ其内七百萬テールハ戰爭諸般ノ費用ヲ賠償スル者
 以テ残り一百萬ハ曾テ廣東ニ於テ其館舎ヲ燒燬セラレタル佛國人民並
 ニ其身体財産ヲ擧ケテ傷損セラレタル宣敎使等ニ償フ者トス又曾
 テ宗教ヲ排撃セラレタルヨリ汚辱ヲ受ケタル寺院教堂等ハ悉ク我
 有ニ歸シ且ツ直隸省中天津府及ヒ其港頭ハ既ニ互市ノ允許ヲ受ケ

和約條款

帝國中ノ他府及ヒ他港同ク外國人貿易ノ自由獲得ルニ至レ
 諸兵隊ハ償金一部ノ交附已ニ了ルヲ以テ天津ヲ撤シ太沽ノ城塞及
 山東省ノ北海岸ニ退キ而シテ他ノ海岸ニ駐留スル者ト同時ニ退カ
 シトス然レモ時宜ニ由リ天津ニ屯營シテ冬ヲ過キ或ハ該所ニ於テ償
 金ノ完了ヲ待ツ如キハ佛將ノ隨意ナリ
 北京ニ和約條款ヲ了スルノ後直チニ諸兵ヲ撤セントス舟山モ亦之ト
 同シ
 英人ノ清廷ト結約スル所佛ト略同シ只其ノ異ナル所ハ香港ノ正面ニ
 シテ陸地ニ距ルヲ三十里ナル九龍ノ突出角ヲ讓リ受ケシノミ
 兩軍國都駐留ノ期限滿ルニ垂トスルニ由リ佛將ハ治裝シテ將ニ發セ
 ントス時ニ英將ニシテ西ラランド氏ハ同國ノ特派全權公使ロールエ

英人兵ヲ撤
 スルノ期ヲ
 延カントス

ルヤン氏ノ言ニ從テ尙ホ起程ノ期數日ヲ延カンヲ佛將ニ請ヘリ
蓋シ英公使ノ意ハ講和條約ノ公布ヲ待チ北京新聞紙ニ掲載スルヲ見
ントス且同氏ハ此事ヲ以テ極メテ緊要トシ其公布ヲ印刷シテ清國中
ノ諸大都ニ掲ケ以テ清國人民ヲシテ普子ク其敗ヲ取ルノ大ナルヲ知
ラメントス

英公使ノ意見斯ノ如シト雖トモ佛公使ハ以爲ラク清國官吏ノ舉動毫
モ疑フ可キモノナキヲ以テ兩國全權公使北京ニ滞留スルノ緊要ナル
ヲ見ス然レモ英公使ヲシテ獨リ滞留セシメ恭親王ト事ヲ議シ佛國全
權公使ヲシテ與カラシメサルカ如キハ亦大ニ不可ナリト
此理由ヲ以テ佛將モントハン氏ハ佛全權公使護衛ノ爲メ重歩兵第百
一聯隊ノ第二大隊及ヒ砲二門ヲ北京ニ留メ嚴寒ノ至ラントスルニ先
チ天津ニ赴カシテ欲シ十月十日親カラ大兵ヲ率テ發シ

佛將其公使
護衛ノ兵ヲ
留メ
十一月一日
佛軍北京ヲ
發ス

十一月六日天津ニ至ル因テ其兵ノ一部ヲシテ空屯營ノ備ヲ爲サシ
佛軍ノ北京ヲ去リ翌日皇帝ヲ逃避セシ熱河ヨリ講和ノ布告到達シ十
一月六日之ヲ北京ノ街上ニ揭示シ佛國トノ條約ハ二日ヲ隔テ英國條
約書ノ側ニ揭示セリ
兩國全權公使ハ北京滯在中屢恭親王ト往復シ親王モ亦漸ク交際ヲ密
シシ情義ヲ厚クセシトスルノ意ヲ表シ英公使ヲシテ北京ニ滞留スル
ノ口實ナカラシメタリ

英軍出發

十一月五日ヨリ第六十七聯隊彈藥隊印度工兵隊並ニ補助諸兵等天津
ニ向テ發シ全軍ノ出發ハ七日ヨリ八日間一行フヘキニ決セリ
七日英將シルロベールナアヒュル氏ノ部下ハ先進シテオランダ
及ヒ中ノオエルンツルソ兩氏英將ニシテ英將ニシテ其部下ノ所屬第二縱

隊ト俱ニ發スルヲ期セシカ適英公使ブリウス氏白河堡ヨリ四十二時
間ヲ以テ來會セシヲ以テ一日間ヲ延滞シフリウス氏モ亦恭親王ニ謁
見シタリ同氏ハ英公使館ニ在テ北京ニ滞留セント欲セシカ冬日ハ公
使館ヲ天津ニ設置スヘキニ決シ北京ニハ獨リ領事館附属アドキンス
氏ヲ留メタリ

前ノ事故ヲ以テ英軍最後ノ出發ハ九日ニ至レリ此日佛全權公使パ
ロン、グロウス氏モ護衛兵ト共ニ發セリ

十一月十四
日兩軍天津
ニ集合

十四日佛英兩軍ハ再ヒ天津ニ集合シ曾テ占領セシ沿岸ノ堡内及ヒ府
内ヲ適宜ニ分割シテ茲ニ駐留セリ

天津ノ英陣

兩國ノ將官ハ速ニ冬日ノ營所ヲ設クヘキ地ニ諸兵ヲ發セントス
英將シルチフランド氏ハ第三十一第六十七第六十ライフハ號大尉
フアス氏ノシテ騎兵並ニ砲兵ニ中隊其内一中隊アルムストロンク

英軍ノ上船

砲等ヲ少將スタベレ―氏ニ附シ天津ニ留メ又三百名ヲ選抜シテ太沽
ノ堡壘ヲ守ラシム
其他ノ英兵四聯隊ノ直チニ本國ニ還スヘキヲ除クノ外總テ上海及ヒ
香港ニ送ルヘキヲ以テ盡ク上船セシム英將シルロベ―ルナアヒエ―ル氏
ハ印度ニ還リ英將シルシヨンミチエ―ル氏ハ司令長官シルチフグ
ラ―ド氏出發ノ後ハ清國駐在ノ英軍總指揮官タリ天津ヲ除キ中央陣地
トモ稱スヘキ上海ニ其本營ヲ設立セリ

ロ―ルエル
シヤン及ヒ
シルチフグ
ランド兩氏
ノ出發

二十六日ロ―ルエルシヤン氏ハ諸兵ニ別レ上海ニ向テ發ス蓋シ北京
滞在ノ日追加條約ヲ以テ決定セシ所ノ同國軍艦ヲシテ揚子江上流ニ
溯ラシムルヲ周旋セントス而シテ英將シルチフグランド氏ハ諸兵
上船ノ畢ルヲ待チ同國全權公使ニ後ル、數日天津ヲ發シ上海ニ至
リ是ヨリ香港ニ赴キ後命ヲ待メントス

コリノ一將
官天津佛兵
ノ指揮官ト
ナル

天津ノ佛陣

シヤマン將
官佛兵ノ大
部ト共ニ上
船ス

佛將モンハシ氏ハ戦争間經過セシ北支那地方ノ總指揮官トシテ將官
コリノ一氏ヲ天津ニ留メ太沽ノ堡壘ハ之ヲ海軍ニ附シ海軍歩兵四百
名ヲ以テ之ヲ守ラシム
天津ノ佛營ハ重歩兵第百二聯隊及ヒ同兵第百一聯隊ノ一大隊砲兵二
中隊内一中隊ハ十二斤一中隊ハ四斤砲橋船兵一枝隊並ニ會計人員等
ニシテ總計士官百二十九名下士卒二千七百名馬匹四百二十九頭ナリ
シヤマン將官ハ重歩兵第百一聯隊ノ第二大隊輕歩兵大隊砲兵二中隊
内一中隊ハ十二斤一中隊ハ四斤火箭隊橋船兵砲廠其他諸課長等ト與
ニ上船シテ上海ニ赴キ十二月十二日ニ至リ佛軍ノ諸兵村落内並ニ徐
家匯ニ設ケタル教會堂ニ分屯セリ
海軍歩兵及ヒ上陸隊ハ海軍中將ノ統轄ニ歸シ多クハ廣東ニ向テ發セ

ハアロング
ロス及ヒモ
ントハシ兩
氏ノ出發

佛將モンハシ氏ハ能ク北京ヲ去ルノ機會ヲ失ハサレ者ト謂フヘシ
諸兵白河ヲ通過シ畢リタル時ハ河流既ニ凍合セリ若シ一週間ヲ遅延
セハ諸軍已ムヲ得ス北方ニ淹滞シテ意外ノ艱苦ヲ受ケシナラン
佛全權公使ハアロングロウス氏ハ英國全權公使ロールエルジャン氏ニ
先ツテ四十八時間ニ發セリ
佛將モンハシ氏ハ船中ノ糧食ヲ天津ニ運搬シ戍衛兵ノ給養ヲ安全
ナラシメタリト雖トモ尙ホ該地ニ於テ無數ノ資糧ヲ要スルヲ以テ其
事務ヲ舉テ之ヲコリノ一將官ニ命ジ置キ十一月二十二日ニ發セリ途
中芝罘ヲ巡廻セシニ第百一聯隊少佐フランチ氏ノ統轄セシ諸般ノ事務
ハ全ク整頓シタリト雖トモ時漸ク嚴冬ニ及ヒ此半島寒威尤烈ナルヲ
以テ第二旅團ニ屬スルモノハ悉ク天津ニ移シ銃工ノ第二中隊ノ枝隊
ハ上海ニ遣シテ兵器ヲ修繕セシムルヲニ議決ス是カ爲メ芝罘ノ衛戍

ハ僅ニ二百五十名至レリ
右ノ人員ヲ以テ上海天津中間ノ哨所ニ備ヘ又白河凍合中陸地ヨリ往復スル道路ヲ守ルニ供スト云フ

司令長官ハ芝罘ヨリ直チニ日本海ニ漫遊セシテ以テ十二月二日上海

ニ着セリ此時北方ヨリ來ルヘキ最後ノ佛兵モ悉ク到着集合セリ

十二月下澣北京和約ノ條款ニ從ヒ舟山島ノ戍兵ヲ撤セリ蓋シ此島ヲ

退去スルノ件ハ英公使ノ教唆ニ出テシ者ニシテ佛公使バアロンダ

ウス氏之レヲ承諾セシト雖トモ佛將モントバン氏ノ如キハ大ニ意見

ヲ異ニシ飽マテ抗議セシト云フ

初メ同盟兩軍ノ舟山島ヲ占領スルヤ佛少佐デスハアリエトハ氏ハ時

機ヲ失ハスニテ海賊カ該地ヲ港灣ニ侵入剽掠スルヲ防遏セシモ由

該島民ハ斯ノ保護メ下ニ安堵ス元幸福ヲ維持セシメテ欲マ此半島

舟山島ノ戍
ヲ撤ス

以テ永ク佛ノ属地ヲシテ願フ赤心ヲ表シテ而シテ英人ノ窃

鴉片搶奪者ニ國賊ヲ教唆スルヲ疑ヒ佛ニ對テルカ如キ誠意ヲ表

スルコトナシ故ニ佛國ハ定海府ニ於テ植民ヲ爲スヲ實ニ容易ナリ佛將

モントバン氏ハ此ニ見ルアリ以爲ヘラク該島ニ貿易ヲ開カハ其利益

シ貴ブレスト因テ永ク兵ヲ駐在スルノ利ヲ説キ其兵ヲ撤スルハ即チ

自ラ國益ヲ棄ル者ナリトマテ論陳シタリシガ其說竟ニ用ラレス後チ

英人ノ九龍島ヲ得ルヲ報テ聞キ先キニ建議セシコトノ無効ニ屬シタル

ヲ以テ遺憾ト爲スト云フ

然レモ到底攻略搶奪ハ今回戰役ノ主眼ニアラス只其目的トスル所ハ

清廷渝盟違約ノ故ヲ以テ我カ海兵ノ生血ヲ白河口ニ濺キタル仇讐ヲ

復スルニ在ルノミ

佛國政府ハ今回亦例ニ因テ全ク功利ノ心ヲ除キ開明ニ導クノ義務

守リ歴史上新勝々目ヲ掲ケルヲ満足スルカ如シ
 百端ノ艱苦ヲ嘗メ百物ノ缺乏ニ惱ミシ我カ遠征軍ハ敵愾報國ノ志深
 ク智略兼備セル將軍ニ屬シテ本邦ヲ距ル六千里外ノ地ニ轉戦シ赫々
 ノ功ヲ奏シタリ而シテ其道路ノ遼遠ヲ厭ハス行旅ノ鬱悶ヲ言ハス漸
 ク上陸スルニ及テハ庶務ヲ整理シ且ツ該地ノ資糧ニ因リ給養及ヒ其
 他ノ準備ヲ爲シ又不幸ニシテ若干船舶ノ沈没スルニ遇ヒ一時爲メニ
 物品ノ欠乏ヲ患ヒシカ司令長官等ノ才幹ト陸海兩軍士官ノ勉勵トニ
 ヲリ百般ノ難事ヲ一掃シ英軍ト同シク軍務ヲ整頓スルニ至レリ
 上陸ノ後モ我軍常ニ危殆ノ方面ニ當ルト雖モ將官ノ指揮其ノ宜シキ
 ナ得諸兵ノ勇氣勃々トシテ銳鋒ノ觸ル所摧破セサルナク戦ヒ毎ニ先
 登シテ凱歌ヲ唱ヘ胸壁上必我國旗ヲ翻ルヲ見ル是レ蓋シ佛國皇帝ノ
 信任シテ疑ハズ將校下士卒報國赤心ヲ致ス所ナリ

我カ遠征軍ハ白河ヨリ北京ニ至ル道程殆ト五十里間ノ諸堡壘ヲ悉
 ク陥レ進テ炎熱ヲ避ケス預メ要害ニ據テ我軍ヲ防禦スル十倍ノ大敵
 ト戦ヒ二回ノ大勝ヲ得テ清國皇帝ノ納涼苑ヲ略シ其國都ヲ占領レ廣
 大ナル帝國政廳ノ中央ニ於テ講和條約ヲ結了シ東洋貿易ノ路ヲ開
 宗教ノ自由ヲ復スル等是レ皆ナ我寡少ナル遠征軍ノ力ニシテ其功績
 實ニ空前絶後ナリト謂フ可シ是レ後世史乘ニ於テ大書特書シテ之ヲ
 無窮ニ垂ルヘキノ事業ニ非スヤ
 日子ヲ費ス久シカラスシテ是等ノ偉功ヲ奏シタルハ專ラ陸兵ニ屬ス
 海軍ハ其地ノ測量探偵ヲ專任トナスニ過キサルノミ然ルト雖トモ其
 歩兵及ヒ上陸兵ニ至テハ亦陸兵ト共ニ戦功ヲ奏セリ
 同盟兩軍ハ一致協同シテ互ニ救護スルノ誠意ヲ表シ又戰爭中ハ殊死
 血戰屢相救援シ管政事上ノミナラス軍事上ニ於テモ亦和親ノ盟誓ニ背

カス佛將モントバン氏及ヒ英將シルチフグラド氏ハ出發前互ニ書牘ヲ往復シテ戮力同心ヲ盟約シ出征中戰略上偶互ニ異見アリト雖トモ兩國ノ兵勢優劣ナク且協同ノ心厚キヲ以テ遂ニ和好ヲ全フスルニ至レリ殊ニ將官コリノ一氏死没ノ際ニ當リテハ兩軍和睦ノ最モ親密ナルヲ表シタリ蓋シ同氏ハ戰爭間幸ニ傷ヲ被リシヲナシト雖トモ天津ニ着シ諸兵ノ指揮ヲ掌ルノ際一朝疾ニ罹リ千八百六十一年一月十五日溘然世ヲ辞シタリ其勤勞ヲ賞シテ中將ニ進メラレタル報モ没後ニ至テ達セシト云フ此勇將ノ葬ニ會スル英人殊ニ多ク常ニ同氏ノ風采卓犖豪俊ナルヲ仰慕シ怡モ本國將官ノ喪ニ遭フカ如キ想ヲ爲シテ皆悲哀ノ情ヲ表セサルナシト云フ

清國人ハ其傲慢無禮背盟違約ノ爲メニ罪ヲ兩國ニ得タル極メテ大ナレトモ佛人ノ度量寛宏ニシテ其性質ノ温順ナルヲ欽慕シ和成ルノ後恭

親王ノ意ヲ以テ兵部尙書ヨリ佛將モントバン氏ニ依頼シ其部下ノ士官若干名ヲシテ歐洲ノ兵學ヲ講習セシメ以テ猖獗ノ寇賊ヲ撲滅セントス然レモ佛將ハ固ク之ヲ辞セリ

出征軍ノ諸人ハ其勇悍ト耐忍トヲ以テ本邦政府望ム所ノ信任ヲ遂ケ其戰ニ臨ム同盟軍ニ後ル、コナク又其情義ヲ損スルコナク遂ニ野蠻ノ敵兵ヲシテ敬ヲ加ヘシムニ至レリ

佛國皇帝モ出征間我カ軍ノ幸福利益ニ就テハ極メテ焦慮シ其奏シ得タル偉大ノ功績ヲ賞讃シ自カラ書ヲ裁シテ佛將モントバン氏ニ賜フ千八百六十一年一月五日上海ニ於テ其文ヲ公布シ諸兵ヲシテ普子ク之ヲ知ラシム即左ノ如シ

我カ親友モントバン氏ヨ子カ統フル所ノ清國遠征軍ハ能ク英軍ト協力同心シ諸ノ艱難ヲ嘗メ欠乏ニ堪エ僅々數月ニシテ偉大ノ

功ヲ奏シタリ是レ皆ナ從軍將校下士卒ノ忍耐ト勇氣トニ富ムノ
致ス所ナリ然ラスンハ焉ソ能ク斯ノ如キヲ得ンヤ
從軍將校下士卒ハ余カ望ム所即チ佛國ノ望ム所ニ負カス余カ喜
悅何ソ之ニ過キン子ハ余カ爲メニ此意ヲ譯解シ詳カニ從軍諸隊
ニ告クヘシ蓋シ從軍諸人ハ皆余カ褒賞ヲ得ヘキナリ就中其褒賞
ヲ專ラニスヘキ者ハ余カ正理ニ基キ定メテ上功ト爲ス所ノ者ニ
歸セサルヲ得ス

親友ヨ子ハ實ニ余カ信任ニ負カス余カ満足ノ証トシテ預メ元老
院中第一席ノ地位ヲ虛フシテ子ヲ優待ス
親友タル將官ヨ余カ最愛ノ情誼ヲ荷フヘシ

那破崙

佛國 清國遠征日誌附錄

僧格林沁ノ建白書千八百六十年八月二十六日○キヤ、チャン其他大
臣ノ建白書九月九日○チツウエン、キン及ヒホー建白書九月十二日
○清國宰相バアンク、スム、チャンノ建白書九月十二日○チシウエン、
キン第二ノ建白書九月十三日○クウカン知事トサア、ヤンインノ建
白書九月十三日○同人建白ノ附言

(此建白書ハ皆納涼苑ニ於テ得タル者ヲ軍隊附屬譯官ノ繙譯ス
ル所ナリ)

僧格林沁ノ建白書

(七月十日即チ千八百六十年八月二十六日)

臣僧格林沁頓首百拜シテ書テ皇帝陛下ニ奉ル伏シテ惟フニ夷狄ノ近
狀駭々日ニ盛ニ今ヤ強テ其政略ヲ斷行セントスル者ノ如シ因テ陳スル
ニ狀ヲ以テレ併セテ請フ臣輩ヲシテ夷狄ヲ掃攘スルノ計ヲ爲サシメ
ンカ爲メ陛下暫ク國都ヲ離レテ出狩有ラントチ是レ臣ノ諸侯伯諸貴
族ニ代リ懇願スル所ナリ
臣嘗テ統轄セシ所ノ太沽ノ堡壘ヲ失フハ職トシテ其北部二壘ノ火藥
庫同時ニ爆發セシニ由ルモノニシテ決シテ兵氣ノ沮喪ヒシニアラス
又防禦ノ策盡キタルニ非ルナリ
臣又夷狄ノ近狀ヲ見ルニ今遽カニ降伏スヘキモノニアラス且ツ其請

求スル所モ却テ前日ヨリ一層ノ驕慢ヲ極ム是レ臣ノ最モ憂フル所ナ
リ蓋シ天津ヨリ通州ニ至ルノ沿道ハ武備既ニ全ク整頓シタリト雖ト
モ若シ通州ニシテ一朝血ヲ喋ムノ地トナラハ北京ノ人心自ラ危懼ヲ
懷キ沸騰動搖ナキヲ欲スルモ得ヘカラス
凡ソ勝敗利鈍ハ時機ニ關スル者ニシテ預メ之レヲ知ルヘカラス若シ
夫レ不幸ニシテ一旦敗ヲ取ルアゾンカ人民ハ群ヲ成シテ北京ヨリ逃
避シ其影響遂ニ軍隊ニ及フヘシ臣輩陛下ノ恩澤ヲ蒙ルヲ厚キニ由リ
粉骨碎身之ニ當ルモ事既ニ此ニ及ハ、復タ之ヲ如何トモスルヲ能ハ
サラン
此危急存亡ノ秋ニ當リ他策アルヲナシ唯々諸侯伯諸貴族ヲシテ其精
兵ヲ率井テ北京ニ來リ國都ヲ守護セシムヘキニ斯ノ策果シテ行ハ
レンカ陛下ノ行幸容易ニシテ鸞輿ノ過ル所人民必崇敬ヲ加ヘン是レ

降ヲ軍門ニ乞フアルヘシ然レモ臣輩以爲ラ急此レ策ヲ得ルモノ
アラズ豈輕シク之ヲ斷行スヘケンヤ僧格林珙カ奏上ル熱河行幸ノ
事ノ如キハ最モ施行スヘカラサルモノナリ北京ハ防禦既ニ整頓シ守
兵亦備レリ若シ北京ノ防禦ヲ以テ未タ足ラストモ熱河ハ如何ナル
地トナスカ特ニ曠漠ノ原野ニシテ驛ヲ駐ムルノ地ニ非ス其他行幸ヨ
リ生スル所ノ弊害更ニコレヨリ大ナル者アリ蓋シ億兆人民ヲシテ一
且車駕ノ蒙塵ヲ知ラシメハ其動搖果シテ如何ヲヤ此時ニ當リテハ土
崩瓦解セサラント欲スルモ得可ラズ鸞輿通州ニ至ラント欲スルモ亦
容易ナラサルヘシ太沽ノ覆轍實ニ鑑ム可シ夷狄既ニ天津ニ闖入ス豈
ニ熱河ニ赴クヲ難シトセン故ニ出狩ノ如キハ皆テ危道ヨシテ未ダ
其利ヲ見ス竊ニ陛下ノ爲メニ取ラサルナリ臣以爲ヘテク今將來ヲ洞
察シテ人各爲不ヘキ所ヲ示ス惟天運ニ從フニ在ルノミ抑々神祖登

祚以來深仁厚澤斯民並休養ニ至茲ニ二百有餘年豈扶神以照靈保爾
蒼天以之樂利用ズル以道盡サレハカヲ故ニ奪臣輩深凄請察ル者
ハ褒賞ノ格ヲ設ケ之ヲ公衆ニ示シ其勇氣鼓舞シ報國盡忠ノ志ヲ獎
勵ス所ニアリ又其開戦上要スル所ノ器具ハ之ヲ完備シ之ヲ補充シ兵
員ハ新ニ之ヲ募リ戰爭攻守ノ略ニ至テハ聖諭ニ由リ諸侯伯諸貴族ヲ
シテ速ニ其方法ヲ討議セシムヘシ願ハクハ陛下臣輩ノ愚忠ヲ察シ幸
ニ採擇ヲ賜ヘテ進止ヲ取ル

臣等謹將
臣等謹將
臣等謹將

(七月二十七日即チ千八百六十年九月十二日)

謹テ案スルニ陛下出狩ノ舉ハ其弊勝テ言フヘカラス若シ斷シテ之ヲ行ハ、必ス禍害ヲ醸生セシメ國家ノ安寧存亡ハ實ニ此一舉ニ在リ慎マ
スンハアルヘカラス臣輩唯行幸停止ノ命ヲ企望ス且臣輩等ノ殊ニ
吃驚歎息セシムル者ハ此舉ヲ以テ夷狄ヲ掃蕩ス由ノ實効計置
ルニ在リ
今陛下熱河ニ行幸セシメ命下ルニ日諸軍團各々其陣備忠爲茲是
蓋シ陛下國家ノ榮華ヲ計スルニ聖意ニ出ツ然レモ方今形勢
臣輩等毎本機知尙且其不可成ルヲ和合試置其理由然
列

論陳スル所有
伏シテ惟不
而シテ國家
人蕃生ヲシ
襲不時ニ當
下ハ鹵簿輜
リ若シ鸞輿
アラントス
ス此禍ハ陛
レ臣輩カ行
元來秋彌ハ
以來ノ例典

ハ四方ニ蜂起シ州郡ヲ剽掠ス天下ノ蒼生唯陛下在上ニ在ルヲ見テ聊
カ依頼安堵ノ思ヲ爲スノミ是レ政府ハ廟算ノ決スル所應援救助ノ出
ル所命令布達ヲ發スル所ナレハナリ
今回急遽ノ行幸ハ名ハ出狩ニ托スト雖其事實ハ蒙塵ナリ之ヲ修飾セン
ト欲スルモ決シテ掩フ可カラズ此事ヤ特ニ國都近傍ノ軍隊ヲシテ沸騰
セシムルノミナラス四方散在ノ軍隊首長等モ皆其部下ノ洵々コ苦マ
シ且ツ土寇ノ威勢ヲシテ益々強盛ナラシムヘハ是レ政府ハ自カラ至重
ノ利權ヲ棄テ最大ノ損失ヲ取ルナリ是レ臣輩カ行幸ヲ非トスル第三
ノ理由ナリ
北京ノ皇宮ハ守備至テ嚴肅ナリ故ニ此危急存亡ノ秋ニ方リ陛下ヲ爲
メニ安全鞏固ノ地ヲ擇フ復此ニ加フル者ナシ實ニ自今急遽出狩ス可
キ時ニハ又沿道ノ警戒ニ至テハ最モ忽ニスヘカラサル者ア

何トナレハ熱河巡視ノ典ヲ廢ス茲ニ四載餘年一旦陛下巡幸ヲ
テ輜重馬匹陸續相列スルハ人民必ス驚駭セン且ツ夫レ熱河ノ人心
ハ亦昔日ノ比ニアラス海陸共ニ賊黨ノ巢穴ナリ常ニ數千ノ衆ヲ擁
テ全國ヲ剽掠シ其勢當ルヘカラス鸞輿モ亦安ソ不測ノ禍ナキヲ保ダ
ンヤ亦安ソ夷狄ノ行幸ヲ利シテ要撃セサルヲ知ランヤ且ツ夫レ方今
媾和條約將ニ局ヲ結ハントス是時ニ當リ鸞輿亦々還テス爲メニ批准
ヲ得ル能ハスレテ日月ヲ遷延セハ則チ禍亂未ダ測ルヘカラサルナリ
是レ臣輩カ行幸ヲ非トスル第三ノ理由ナリ
土寇ノ蜂起セシ以來財政ノ困難ハ一層甚タシク國都ノ諸費ヲ支辨ス
ルストラ猶且ツ容易ナラサル者有リ熱河ハ蒙古ノ地方ニアリ神祖キエ
ンロンシ(乾隆帝カ)及ヒキヤキン(嘉慶帝カ)兩帝ノ同所ニ駐輦中ハ熱河
ヲシテ稍ヤ觀ルヘキ者アラシメント欲シ爲メニ消費セシ金額幾億ナ

ルヲ知シ又賜ラス今少國財ヲ以テ其諸費ヲ供給セントスル抑々亦難
 シ我輩主管ノ官衙ニ向テ之ヲ督促スルヲ能ハサズナリ又陪從スヘキ
 將校下士ヲ算スルニ其員凡少一萬人以上スルヘシ之ヲシテ常ニ缺乏
 リ憂ナカラシメ以可計リ若少クモ缺乏ニ苦マハ途ニシテ亡命遁逃
 セシ此輩或ハ賊黨ノ勢力ヲ助ケ共ニ不軌ヲ圖ルモ亦未タ知ルヘカラ
 ス是レ則チ臣輩カ行幸ヲ非トスル第四ノ理由ナリ
 前條具陳スル所ノ理由ヲ諒察シ行幸ノ如キ舊例ニ從テ泰平ノ時ヲ
 待テ施行モ可シシテ是レ臣輩ノ願ヲ所ナリ
 夷狄ノ兵員ヲ算其數ニ一萬人ニ足ラズ僧格林陀統帥ル所ノ兵ハ三萬
 ニ過キタリ臣輩以爲ハ少衆能ク寡ヲ制スヘシ而シテ無謀ノ行幸
 ナ爲シテ臣輩欲以是レ臣輩未タ解送スル所以ナリ且ツ夫レ夷狄萬里
 波濤々陵々來ル者ハ難通商貿易ノ利ヲ謀ルニ過ル不故且廣東軍渡上

海及モ其他地方ニ居留スルヲ得ハ其望ニスニ足レリ國土ヲ侵略スル
 ノ意計キヤ明カナリ彼今少シク疑フ所アルヲ以テ北京ニ來ル其通商
 貿易ノ素志ヲ遂ケント欲スルニアルノミ決シテ恐ルヘキニアラス
 若シ夷狄ノ北京ニ入ルニ先チ車駕播遷スルカ如キアラハ人民ノ驚駭
 擾亂スル賊徒ノ剽掠跋扈スル復タ制スヘカラサルナリ
 又行幸ニ就キ奏上スヘキ他ノ一理由アリ則チ龍體今日ノ如ク虛弱ニ
 レテ好テ此般ノ危險ヲ冒シ艱難ヲ嘗ムル如キハ亦失計ノ甚タシキモ
 ノト謂フヘシ

清國宰相ハアングスムチアンノ建白書

(咸豐十年七月二十七日即チ千八百六十年九月十二日)

臣
バアングスムチアン方今ノ時勢ヲ察シ謹テ愚瞽ヲ獻ス請フ採擇ヲ
賜ヘ臣ノ傳聞スル所ニ據レハ僧格林氏ハ陛下ノ自カラ軍頭ニ立テ征
討ニ從事シ或ハ熱河ニ出狩アランテ懇請スルヲ以テ陛下之ヲ諸大臣
ニ下シ其是非當否ヲ審議討論セシメ而シテ衆說符節ヲ合スルカ如ク
萬口一辭其非舉タルヲ論陳シ三策未ダ決スル所アラスト臣
下ノ軍旅ヲ統ヘテ親征アルカ如キハ實ニ萬一ノ僥倖ヲ望ムニ過キス
シテ殆ント聖体ヲ以テ孤注トナス者ニ似タリ其熱河行幸ニ如キ
層危險ニシテ施行スルカヲ新ノ事ニシテ

僧格林氏ハ人智爲リヲ考ズ其勇ハ餘リ有リト雖トモ素ト學識足
ラス是レ今回論議ヲ發シル所以也祖先ノ營國都ヲ離レテ時行
幸スル其例ハ非然ラズ每ニ國亂ヲ釀生シ紛擾々實ニ名狀
ハカラス後チ之ヲ戡定セシメ欲シテ衆庶離叛シ遂ニ土崩瓦解ヲ致
セリ是レ陛下ノ知レ所アラズヤ且ツ夫以目今夷狄要請ノ條款ヲ容レ
ザル者ハ特ニ財政ノ困難ヲ以テ然レノミナラス其甚不可ナル者アレ
ハナリ臣以爲ヘラズ當今ノ急務ハ社稷ト共ニ斃ルヘノ精神ヲ以テ夷
狄ヲ討滅スヘキヲ
今臣ノ奏請スル所唯此一策アリ願ハクハ陛下急ニ一隊一萬五千人ヲ
發シテ天津府ニ趣キ其城郭ニ據リ再ヒ開戦シテ彼ノ軍事ニ老練ナル
レンホー將軍ニ二三ノ副將ヲ屬シ以テ之ヲ補佐セシメ僧格林氏及ヒ
ソト

レ其勝利ヲ得ヘキハ亦疑ヲ容レズ若シ夫レ一旦勝ヲ得ハ其講和ハ春
 ナ埃テ之ヲ議スヘシ斯ノ如クナレハ其和約章程モ一層ノ完全ヲ加フ
 ルニ至ルヘシ
 權謀術數ハ戰爭ニ免カルヘカラサルモノナリ故ニ夷狄ニシテ勇挫ケ
 氣沮ミ來テ降ヲ軍門ニ乞フキハ我機ニ乘シテ之ヲ襲ヒ大ニ之ヲ擊破
 シ而シテ後嚴ニ國都ノ近傍ヲ鎖閉スヘシ愚見斯ノ如シ之ヲ施行スル
 固ヨリ易々タルノミ奈何ソ熱河ニ避クルヲ須ヒンヤ
 臣ノ淺知非才ナルモ今日危殆ノ形勢ヲ目撃シ杞憂ニ堪ヘサル者アリ
 肺肝ヲ吐露シ以テ陛下ノ明察ヲ乞フ是レ臣ノ宜シク爲スヘキ所ヲ職
 分ナリ仰キ願ハクハ陛下祖先創業ノ艱難ヲ思ヒ文武百僚ヲ會シテ國
 家ノ存亡此一舉ニアルヲ論シ以テ敵愾ノ氣ヲ獎勵アゾント是レ臣
 ノ奏上スル趣旨ナリ幸甚聖意ヲ垂レヨ

清國宰相チシウエンキン其他大臣二十二名ノ建白書

(七月二十八日即チ千八百六十年九月十三日)

臣
 チシウエンキン等謹テ陛下北狩ノ舉クル一大禍亂ノ原タルヲ再述
 セン苟モ陛下ノ爲メニ忠ヲ盡サント欲シ軍隊中ニアル者ハ咸テ陛下
 ノ北京ニ安坐セラル、コトヲ仰望スル極メテ切ナリ
 凡ソ國家存亡ノ際ニ當テハ忠臣ハ其遭遇スル事變ニ由リ報國盡忠死
 ナ以テ各々其職ヲ守ルヘキナリ 臣輩今日陛下ノ出狩ニ由リテ禍亂ヲ
 掃蕩セントスルノ聖慮ヲ知り又親征シテ軍頭ニ立ント欲スルノ布達
 ナ捧讀セリ曰ク敵兵馬頭及ヒ通州ノ傍ニアラサルハ我衆ヲ擁シテ
 北京ノ北部ニ至リ陣ヲ固メテ將ニ持重セントスト 臣輩此書策極メテ

妙ニシテ誠ニ遠大ノ謀計ナルヲ知ルモ雖トモ如何モ天下萬民ノ淺
 知薄才ナル陛下深意ノ在ル所ヲ察セズ疑懼百端其想像ヲ誤マルニ至
 ルヘシ而シテ彼ノ夷狄國都ノ東南ニ入ルニ至テハ衆皆陛下ノ軍頭ニ
 立テ陣チ國都ノ北部ニ布キ遙ニ通州駐留シ僧格林氏ニ聲援スルヲ深
 慮遠謀タルヲ信ゼテ將ニ曰ハシトス車駕播遷シ由戰ヲ避ケテ
 スト果シテ此ノ如クナラハ萬民ノ流離顛沛軍隊ノ沸騰紛擾蓋シ名狀
 スヘカヲサル者難クシトス
 國家ノ危急ナル未嘗今日ヨリ甚クシテ者アラハ大陸軍ニ與ヒ國都ヲ去
 ラハ祖先ノ山陵及ヒ神祠佛閣亦皆汚辱摧破セラレ帝國全土從テ湮滅
 ニ歸セン故ニ陛下安全ヲ得ルニ地ハ國都ニ若クハ内
 其他長城ノ傍ハヲセクハ露西亞人ノ屯集スル所ニシテ從來北京政
 府ト交通極難ク常ニ不軌ヲ謀ル者大ニ志ヲ謀リ且該地方タルノ

賊徒心中ニ群居時ニ出テ剽掠チ事トシ官吏商賈ヲ問ハス往々其擊殺
 終ニ所トシテ北京ノ之ヲ反シテ堅固ノ城郭ヲ加ス羈縻戍兵最モ多
 ク防禦極メテ嚴キ也ハ假令夷狄等來冠スルモ復畏レテ足ラス夫或
 云フ夷虜風輦ノ一タニ出ツルヲ聞カハ必ス慚愧シテ萎靡振ハサルニ
 至ルヘシト然レモ若シ之ヲ反以夷狄益猖獗チ極西國難從テ增長セヤ
 其亡國ノ罪ハ彼レニアラスシテ却テ臣輩ニ罪アリキ
 陛下、左右侍從ハ必ス云フシ群臣上奏シテ命回シ行幸ヲ止マ然レ庶
 他ノ奇策以テ危難ヲ避クヘキ者ナカラント臣輩以爲諸官カ苦心憂慮
 スル未タ今日ヨリ甚クシキハアラサルナリ今行幸ヲ以テ危難ヲ避ケ
 ト欲ス臣輩其禍測ルヘカラサルモノアルヲ知ル茲ニ最モ見易キ者三
 條ヲ開陳セシ
 陛下熱河ニ赴キ道路梗塞シ復還御ニ由ナク驛ヲ該所ニ留ムル片

ハ勢束縛ヲ受ルカ如シ陛下何ヲ以テ之ニ處セン
 陛下北狩ノ後國都紛擾人心洶々此必然ノ勢ナリ陛下何ヲ以テ之ヲ鎮
 セン
 陛下危難ニ遭遇スル必ス國都ニ在ルノ日ヨリ甚シキモノアラソ陛下
 何ヲ以テ之ヲ避ケン
 凡ソ一國ノ君主社稷ト存亡ヲ共ニスルハ古ノ道ナリ陛下固ヨリ之ヲ熟
 知スヘシ然レトモ是レ臣輩ノ言フニ忍ヒサル所ナリ臣輩日夜黽勉シ
 テ艱難ヲ憚ラサル所以ノ者ハ只陛下ノ爲メニ凡百ノ危難ヲ排セント
 欲スルニ過キサルノミ
 今日ハ實ニ國家存亡ノ關スル所而シテ人心ノ動搖ヲ鎮スルハ最モ急
 務ナリ臣輩危殆困難ノ時勢ヲ見テ默止スルニ忍ヒス嚴罰ヲ願ヒス愚
 見ヲ陳レテ以テ命ヲ俟ツ

山崎闇齋文藝通釋事考卷之九ノ建自書ノ帝位ノ事ノ一節ニ

(七月二十八日即チ千八百六十年九月十五日)

臣トサズヤン、イン頓首百拜ヒテ書テ皇帝陛下ニ上ル熟ラ目今ノ形勢
 ナ觀察スルニ夷狄益々猖獗ヲ極メ平穩ノ結局未ダ何レノ日ニアラズ
 知ラス今ノ計ヲ爲スニ陛下宜シク國都ヲ固守シ帝祚ヲ鞏固ニシ以テ
 天下萬民ノ望ミヲ繫ケ神祖及ヒ保護諸神ノ意ヲ安シスヘシ是目今ノ
 急務ナリ
 夷狄天津ヲ略セシヨリ以來屢々集議院ニ會シテ討論シ其議スル所極
 メテ周密ナリト雖トモ至ル所紛擾動搖特ニ甚ダシク殆ント其底止ス
 所麻ヲ知ラス實ニ物議露々人心洶々ノ時ナリ臣頃日彙報ヲ視ルニ

搭林氏已ニ氣シテ及ヒハシサフニ選送ニ由リ忽チ
 貶謫セラレ陛下特ニ重シク給テクシリシク及ヒハシ
 大難事ヲ辨理セシメント云フ其後チ飛書報スル所ニ據ルニ或ハ
 夷狄ヲ請求如何ヲ問ハス必ス講和スヘシト云ヒ或ハ二千萬テールノ
 償金ヲ以テ約ヲ訂ス其内ニ百萬テール直チ償却スヘシ然レモ未ダ全
 ク結局ニ至ラズ云フ其他之ト至ク相反スル者アリ新チ蒙古兵一
 萬人ヲ募集シテ大戰闘ヲナス云フ云ヒ且陛下親征ノ舉ハ異論ヲ唱
 フル者多シト云フ詭言沸騰シテ衆情疑懼ス雖トモ中ニ就テ臣輩
 最モ憂ニ堪ヘス天下萬民ノ心チシテ動搖セシムル者ハ熱河行幸ヨリ
 甚ダシキナリ若シ之ヲ實行セバ特チ人民ヲ危懼ヲ加ルノミナラス
 其禍難更ニ甚ダシキ者アラフ嗚呼陛下蒼生ヲ見ル果シテ如何祖先ノ
 山陵神佛ヲ祭壇等ヲ以テ何物ニ比スル抑シ百年ノ帝祚ヲ棄テ、願ミ

々興做展ノ如ク後世清史是事ヲ記シル果其如何歟願定以來危
 急存亡ノ際ニ臨キ後患有ルヲ細尋取テ堪遊也若シ驚興一々夷動
 然テハ國都隨テ兵亂ニ罹ル其禍延テ熱河及マ東固更リ輪ヲ俟タズ
 願茲ク天陛下少シテ聖意ヲ留メ時勢ヲ洞察シ皇宮ヲ安坐シ蒼生ヲ
 テ大ニ信憑スル所ヲ示シメンヨクテ
 北京守備極メテ嚴シク守兵忠勇ナリ婦女幼童ト雖トモ意氣凜然
 且チ皆玉帛ニ敵ヲ思フ僧格林沁ハ蒙古大軍ト圍首軍ヲ統率備
 整肅用フヘシ今必シ臣國帑費ヲ新兵ヲ徵募シテ書須ト不恐彼
 誠忠義烈ナルハ決シテ他族ヲ得テ勳カス可成所非テ初メ夷狄ヲ
 襲スルニ當リ僧格林沁ヲ以テ太沽北塘等ヲ守リ其精兵ヲ擁スルコト
 日ノ如ク且ツ夷狄等ノ上陸ヲ俟テ直ニ之ヲ攻撃シ夷狄等ヲ屠殺セ
 亦疑テ容レズ然リ而シテ彼等ヲ非戰論者動モ至テ是障碍者此

策遂行ハシテ夷狄ヲシテ天津ヲ略シ至ル是則非戰論者以
 速シ所ノ禍ニ入ラズシテ何ソ昔シ蒙古人宋國都ヲ侵略セ
 リヨ一フト岳飛ハ軍隊ヲ指揮シ大ニ力ヲ盡シ其地ヲサ
 州之ヲ擯ケテ用ヒス國勢是ヨリ振ハス土崩瓦解ヲ致セリ若
 君側ニツサズシテ其人ヲ如キ者ア未ダハ國論ニ害及リ不
 罪ヲ責ガ以テ之ヲ嚴罰ニ處ス降下幸ニ賊ヲ圍テ軍隊指
 事未舉テ僧格林沁ニ任シ彼ノ唐朝臣一ツシガ其過ヲ改ム
 サルヲ以テ山東ニ賊兵ヲシテ忽チ順ニ歸セシムルニ倣フ
 又速ニ天津ニ於テ義勇兵ヲ招募シ彼ノ千八百五十三年
 徒侵入ノ際及ヒ客年夷狄ノ同所ニ侵入時之ヲ用テ大ニ功
 宜シク勸テ下シ悉ク其兵ヲ僧格林沁ノ統轄ニ屬セシム
 ノ兵燹算フニ其員數千火器過キ而シテ其過半ヲ我カ亂民
 源

處盛其宜ニキ得難ニ難ニ成醜類ヲ粉碎シ實ニ容易ニ
 へシ何事其策ヲ出テサル是レ臣ノ疑團ヲ抱ク所以ナリ且其費用
 モ亦決シテ和ヲ講スルノ賠償比テ千倍ニ多ク其急償
 スル者其價二百萬千兩ニ計雖トモ老練ノ政治家ヨリ之ヲ觀レ
 畢竟夷狄等ノ誑誘毎年種々ノ若情ヲ唱ヘ其口實ヲ與人其難
 ハ舉テ言テ難シク彼等ノ誑誘及ヒテ我々ノ兩氏ハ賊徒討伐
 其爲メ數百萬テールヲ請求シタルヲ以テ人民負擔ノ重キニ堪ヘサ
 下トス陸下其請求ヲ允許シ天下ノ昇平無事ニ復スベキ約セシ
 ラスヤ
 方今ノ形勢ハ熟察スルニ戰以テ醜虜ヲ擊破シ彼ヨリテ畏縮窮
 シメ然ル後徐カニ講和スヘシ神祖ノ遺書ニ英夷ト和ヲ結ビタルハ天
 下後世ニ傳辱ヲ貼シテ其言最明瞭ナリ

(七月二十八日即チ千八百六十年九月十三日)

前ノ上書ヲ草シ終ラシメスル際ニ此日ノ布達ヲ得テ謹テ之ヲ讀ム
其文ニ曰ク

夷狄益々猖獗既ニ國都ニ逼リ時勢極メテ急ナリ故ニ非常ノ舉動ヲ
以テ人心ヲ鼓舞作興セサルベカラズ今出將ノ舉テ斷行スルニ
敵兵ニ抗戰スル我カ軍隊ノ指揮上ニ便利ヲ與ヘ家ムルモノアリ爾
後ハホシシ然エシウシ(帝ノ叔父)萬事ヲ負擔シ北京戍兵ヲ增置
ルノ事共及フベシ

若シ行幸ノ途中馬頭通關ニ於テ敵ト遇テ預定ノ如シ北京及北部

ニ布陣スヘシ夷狄ノ總數僅ニ一萬人ニ過キス之ヲ討滅スルコト容易
ニシテ軍隊中一人ノ疑フ者ナカルヘシ

此布達ハ全國諸侯伯ノ宜シク捧讀スヘキモノナリ

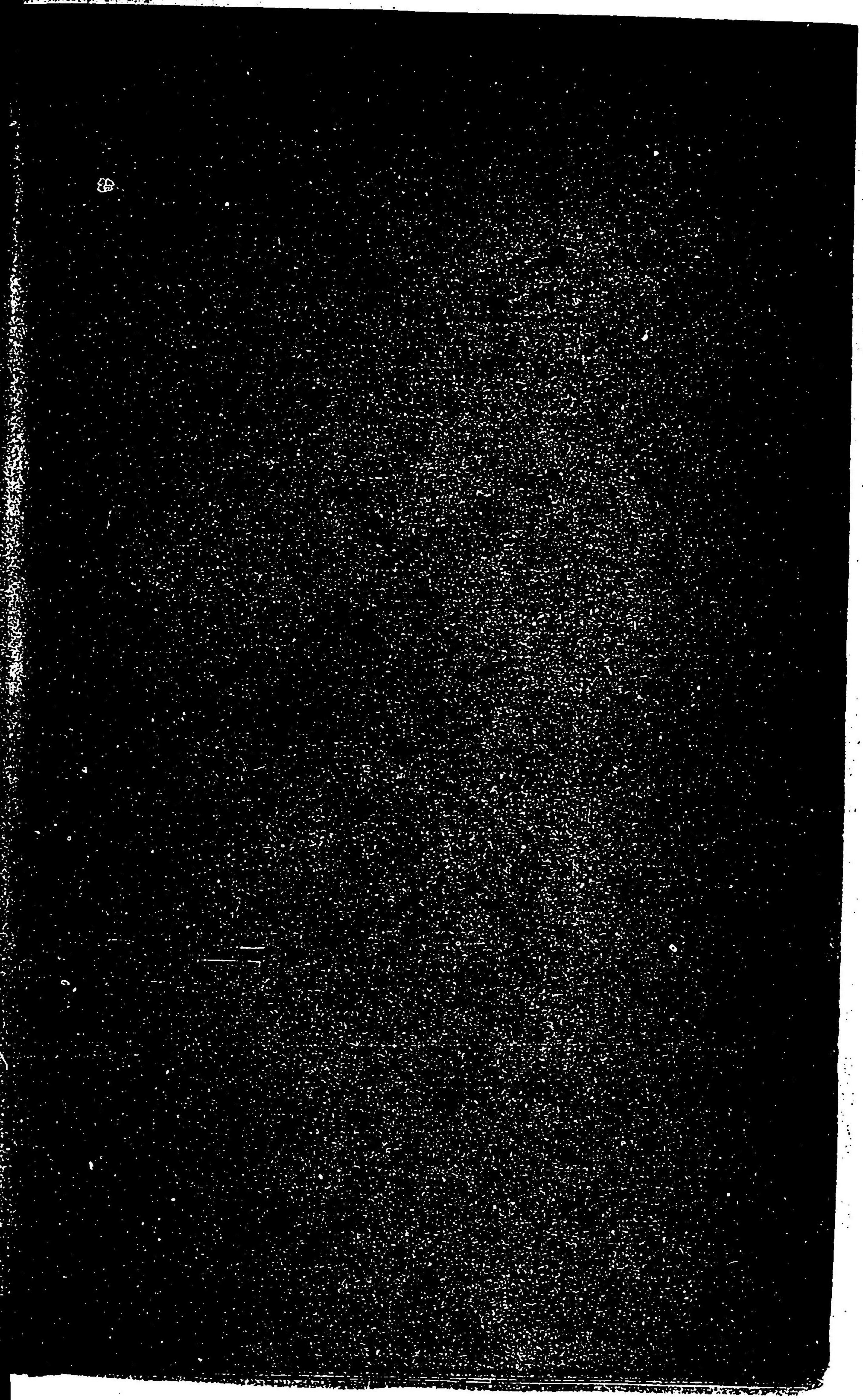
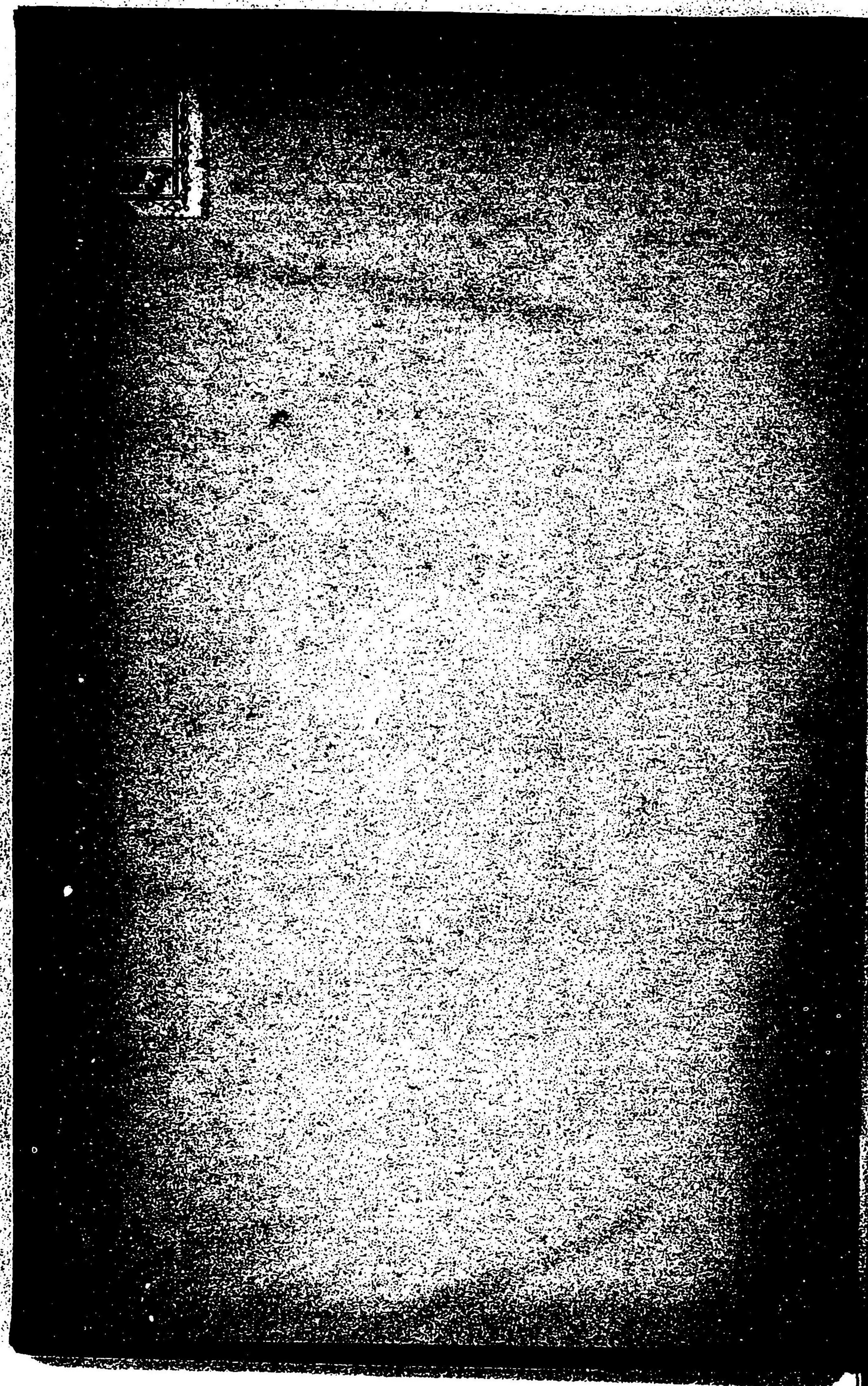
夫レ斯ノ如シ風聲ノ出ツルヤ既ニ決セリ嗚呼何ツ社稷宗廟ヲ慮テサ
ルノ甚シキヤ若シ實ニ親征ノ聖意アラハ何ツ大軍ヲ擁シテ北部ニ陣
スルヲ須ヒンヤ

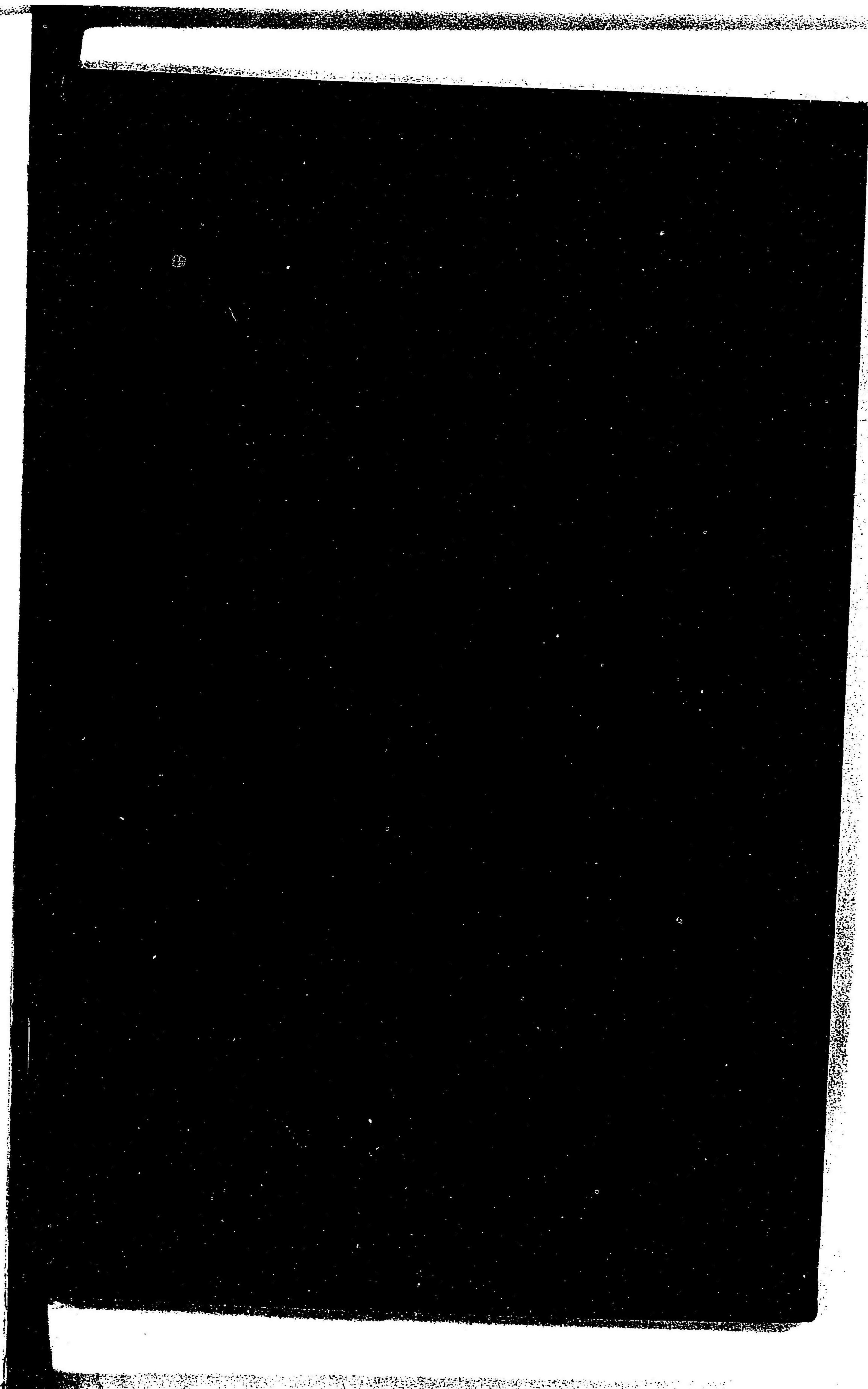
今回布達ノ旨意ハ未ク以テ人民ノ信ヲ取ルニ足ラス彼ノ僧格林沁カ
部下ノ兵ヲ以テ戰功ヲ奏スルニ餘リアリ陛下何ツ必シモ勞苦ヲ顧ミ
ス故ラニ親カラ戰鬪ノ危難ヲ冒スヘケンヤ

國家存亡ノ機多言ヲ須ヒス唯速ニ國都ニ還リ以テ軍國ノ大事ヲ指揮
スルニ在ルンニ是レ臣カ懇請スル所以ナリ請少シシ聖聽ヲ留メヨ

明治十七年一月

定價金三拾錢





28

123

051617-001-6

28-123

仏国陸軍清国遠征日誌

陸軍文庫

M17

BFB-0394

